

ジュール・ヴェルヌ

海上封鎖破り

三 枝 大 修 訳

I デルフィン号

蒸気船の外輪の下に水泡^{みなわ}を立てた最初の河川は、クライド川であった。1812年のことである。船の名はコメット号、グラスゴーとグリーンノックのあいだを時速6マイルで定期運航していた。それ以来、スコットランドのこの川の流れを遡ったり下ったりした蒸気船や郵便船^{バケット・ボート}の数は100万を超えるわけだから、この一大商業都市の住民は、蒸気による航行の驚異にもすっかり慣れっこになっているにちがいない。

ところが1862年12月3日のこと、船主や貿易商や工場主や労働者や船乗りや女性や子供からなる大群衆が、泥でぬかるんだグラスゴーの街路を埋め尽くし、ケルヴィン・ドックの方へ、すなわちトッド氏とマグレガー氏の所有する巨大な造船工場の方へと向かっていた。この二人のうち、後者の名前だけでも十分にお分かりになるだろうが¹⁾、あの名高い高地人^{ハイランダー}²⁾の子孫たちはいまでは実業家になっており、古くからある氏族^{クラン}³⁾の臣下を

1) 「マグレガー」はスコットランド高地地方の名門氏族の一つ。

2) スコットランド北部の高地^{ハイランド}地方の住民、およびその地方出身の連隊兵のこと。

3) 氏族はスコットランド、特にその高地^{ハイランド}地方に古くから根付いていた社会制度であり、先祖、血縁、姓を共有する人々の共同体を指す。氏族の構成員は氏族長に忠誠を誓い、氏族長はそれに応じて構成員を守るために敵と戦うこと

みな工場労働者にしていたのである。

ケルヴィン・ドックはクライド川の右岸、街から数分の場所にあるのだが、その広大な作業場は、じきに野次馬であふれかえった。栈橋の端であれ、埠頭^{ワーフ}の壁であれ、倉庫の屋根であれ、空いている場所など少しもなかった。川の中でさえ、小舟が縦横に行き交っていたし、左岸の方、ゴヴァン⁴⁾の高台にも見物客がひしめいていた。

とはいえ、何か途方もない式典が行われるというわけではなく、単に1隻の船の進水が予定されているだけだった。グラスゴーの人々は、この種の作業にともなうあれやこれやには飽き飽きしているはずだ。してみると、デルフィン号⁵⁾——それこそがトッド氏とマグレガー氏の建造している船の名前だった——には何か特別なところでもあったのだろうか？ いや、実を言うと、そんなものはなかった。それは鋼板製、1500トンの大きな船であり、その内部は少しでも速度を増せるようにすべてが設えられていた。ランスフィールド鉄工所⁶⁾の作業場で造られた機関は高压であり、500馬力の有効力を備えていた。その機関が駆動させる2本のスクリューは、船尾のほっそりとした部分にある骨材の両側に対をなすようにして取り付けられており、片方をもう片方から完全に独立して動かすことができた——これは、ミルウォール⁷⁾にあるダジョン社⁸⁾のシステムのまったくもって

を誓った。なお、「氏族 (clan)」の語源であるゲール語の「clann」は「子どもたち」の意。

- 4) グラスゴーの西郊、クライド川沿いに存在していた街。1912年にグラスゴー市に編入され、現在はグラスゴーの街区の一つとなっている。
- 5) 「デルフィン (delphin)」はラテン語で「イルカ」の意。
- 6) グラスゴーのアンダーストン地区、ランスフィールド通りに存在していた鉄工所。
- 7) ロンドンのタワーハムレッツ・ロンドン自治区内の地区の名称。
- 8) とともに技師であったジョン (John Dudgeon, 1816-81) とウィリアム (William Dudgeon, 1818-75) のダジョン兄弟が1859年にロンドンのミルウォール地区に設立した造船会社。ヴェルヌが記しているとおり、先進的な船のエンジンや2本のスクリューによる航行システムの開発で評判をとった。1862年にはロンドンのキュービット・タウンに新たな造船場を建設し、そこで建造された封鎖突破船が南北戦争で実際に活躍している。

斬新な応用であり、船舶の速度を大いに上げるとともに、きわめて狭い円弧の中で船が旋回することを可能にしている。一方、デルフィン号の喫水はそれほど深くはなさそうだった。目利きの人々は、見誤ることなく、この船はほどほどの深さの水路を頻繁に航行するために造られたもののなのだろう、と結論づけていたのだが、それも無理からぬことだった。だが結局のところ、こういった特徴をすべてかき集めてみたところで、街の人々の熱狂の原因をいささかなりとも説明できるわけではなかった。要するに、デルフィン号は、他の船と比べてどこかが優れているわけでも、どこかが劣っているわけでもなかったのである。ならば、進水させるにあたって乗り越えなければならない何らかの力学的な困難が想定されていた、ということなのだろうか？　そういうわけでもなかった。クライド川はすでにこれよりも積量の大きな船をたくさん迎え入れていたし、デルフィン号の進水は平凡きわまりないかたちで行われようとしていたからである。

実際、潮の流れが止まり、引き潮が感じられるようになった瞬間に作業は開始された。船の竜骨を持ち上げるための楔^{くさび}に一斉に槌を打つ音が響いたのである。この重々しい建造物全体に、すぐに振動が走った。持ち上げられたのはごくわずかだったかもしれないが、船体のぐらつくのが感じられた。ついで、滑っているのがはっきりと分かるようになり、その速度が増し、まもなくデルフィン号は、念入りに油脂の塗られた船台を離れ、分厚い渦を巻いている白い蒸気のただ中でクライド川に沈み込んだ。船尾が川底の泥に接触し、ついで大波の背に乗って身を起こしたのだが、勢いがついてしまったため、もしも全ての錨がものすごい音を立てて同時に投下され、その疾走に歯止めをかけていなかったら、この素晴らしい蒸気船はゴヴェンの作業場の堤防にぶつかって大破してしまっていたことだろう。

進水は完璧に成功していた。デルフィン号はクライド川の水上で穏やかに揺れていた。船が己にふさわしい自然界の元素⁹⁾をわがものとするや否や、見物人たちはみな手を叩き、右岸でも左岸でも盛大な歓声が上がった。

が、しかし、この歓呼の声や拍手喝采にはいったいどんな理由があったのだろうか？ きっと見物人の中でいちばん熱中していた連中でさえ、その熱狂について説明しろと言われたら、ひどく難儀してしまったにちがいない。ならば、この船がかき立てていた格別の興味関心は、どこから来ていたのだろうか？ ごく単純に、その目的地が謎に包まれている、ということから来ていたのである。この船がどんな種類の商取引を行おうとしているのかは詳らかになっていないので、もしも誰かがさまざまな野次馬のグループに尋ねてみたとしたら、この重要な点に関して述べられる意見の多様性に——無理もないことではあるが——びっくりしてしまったことだろう。

とはいえ、いちばんの事情通、もしくはそう自認している連中は、当時、アメリカ合衆国で多くの人命を奪っていたあの凄まじい戦争¹⁰⁾において、この蒸気船は何らかの役割を果たす予定なのだ、ということで意見の一致を見ていた。が、それ以上のことは知らなかったのも、デルフィン号が私掠船なのか、輸送船なのか、南部連合の船なのか、北部連邦の海軍の艦船なのか、という点については誰一人として言い当てることができなかったはずだ。

「万歳！」デルフィン号が建造されたのは南部諸州のためなのだ、と請け合いながら、そう叫んでいる者がいた。

「いいぞ！ いいぞ！ いいぞ！」これほどの快速船がアメリカの沿岸を巡航したことはなかったはずだ、と断言しつつ、他の者も声を張り上げていた。

というわけで、その正体は謎に包まれていたわけだが、この船にまつわ

9) 「自然界の元素 (élément naturel)」はヴェルヌが好んで用いる表現であり、風、火、水、土などを指すが、ここではもちろん水のこと。

10) 1861年4月12日に勃発し、1865年4月9日に終結した南北戦争のこと。この間の両軍の死者は60万人、すなわちアメリカ合衆国の当時の人口の約2パーセントに上ると推定されている。

る事情を正確に知るためには、グラスゴーにあるヴィンセント・プレイフェア商会の社員であるか、あるいは少なくともその親しい友人であることが必要だっただろう。

財力があり、権力があり、知略にも長けていた——ヴィンセント・プレイフェア商会という商号をもつ、この商社は、街でいちばん美しい地区を建設したあのタバコ長者¹¹⁾らの後裔にあたる、誉れ高き旧家である。商売上手なこの貿易商たちは、合同法¹²⁾が成立したのを受けて、最初のグラスゴー商館を開設し、ヴァージニアとメリーランドのタバコの取引を行った¹³⁾。莫大な財産ができた。その結果、新たな商業の中心地がつけられたわけだ。じきにグラスゴーは工業と製造業の都市となった。いたるところに紡績工場と鋳造所が建ち、数年のうちに街の繁栄は最高潮に達した。

プレイフェア商会は、先祖伝来の進取の気質に忠実であり続けた。大胆きわまりない商取引に身を投じ、英国商業界の名誉を堅持した。現会長ヴィンセント・プレイフェアは御年 50 歳、根っこの部分では実際的かつ実利主義的な性格の持ち主だが、思い切りもよく、純血種の船主だった。商売のことを除けば何に心を動かされることもなく、商取引の政治的な側面についても頓着しなかった。加えて、非の打ちどころのないほど誠実かつ公正な人物だった。

-
- 11) 18 世紀に北米植民地産のタバコの売買によって財を成したグラスゴーの豪商たちのこと（英語では「tobacco lords」）。フランス領内へのタバコ輸入の独占権を得るなどして莫大な財産を築いた彼らは、貴族さながらの生活様式を採用し、グラスゴーの街のあちこちに優美な邸宅や教会を建設した。なお、アメリカ合衆国の独立後はタバコ貿易が下火となり、グラスゴーの貿易商の収益源は綿の輸入の方にシフトしていった。
 - 12) イングランド王国とスコットランド王国の合併を定めた法律。イングランド議会在が制定した「1706 年スコットランド合同法」とスコットランド議会在が制定した「1707 年イングランド合同法」の二つからなる。この法の制定によってグレートブリテン王国が誕生した。
 - 13) アメリカ合衆国の独立以前から、タバコはイギリス旧帝国の北米植民地における最大の輸出品であり、ヴァージニア植民地とメリーランド植民地は特にその生産量が多かった。

とはいえ、デルフィン号を建造して艤装する、というあのアイディアについては自分のものと主張することはできなかった。それは、彼の甥、30歳の美青年であり、連合王国の商船団の中で最も豪胆な^{スキッパー}船長¹⁴⁾である、ジェイムズ・プレイフェアのものだったのである。

ある日、アメリカの新聞各紙を読んで怒り心頭に発したあとで、ジェイムズ・プレイフェアがじつに向こう見ずな計画について伯父に打ち明けたのは、タウンホールのアーチの下にあるトンティン・コーヒー・ルーム¹⁵⁾でのことだった。

「ヴィンセント伯父さん」と彼は出し抜けに言った。「ひと月もかからずに200万儲ける手がありますよ！」

「だが、リスクの方は？」とヴィンセント伯父さんが尋ねた。

「船1隻と、積み荷です」

「それだけか？」

「いや、ほかにもあります。乗組員と船長の命です。でも、そんなのは、どうってことありません」

「どれどれ、どんなものだろうね」というのがヴィンセント伯父さんのお返事。この冗長な表現^{プレオナスム}がお気に召していたのだ。

「万事、検討済みですよ」とジェイムズ・プレイフェアが引き取った。「トリビューン紙、ニューヨーク・ヘラルド紙、タイムズ紙、リッチモンド・インクワイアラー紙、アメリカン・レビュー紙はもうお読みになりましたか？」

「20遍も読んだよ」

14) [原註——英国で商船の船長に与えられる呼称。]

15) グラスゴーのトロンゲート通りに存在していたトンティン・ビルディング1階のコーヒー・ルーム。当時のグラスゴーの商業・社交の中心地の一つであり、街の名士の集う場所として栄えた。トンティン・ビルディング内にはコーヒー・ルームのほか、ホテル、集会場、読書室などが併設され、トンティン・ソサエティの会員であれば、各種新聞を読むこともできたという。

「合衆国での戦争はまだ長引くとお考えですか？　ぼくはそう思っているんですが」

「ずいぶんと長引くだろうね」

「この諍いのせいで、英国の収益の、またとりわけグラスゴーの収益の回収がどれほど遅れているか、ご存じですか？」

「中でも特に、プレイフェア商会の収益がな」とヴィンセント伯父さんは答えた。

「特に、それですよ」と若き船長も応じた。

「おかげでわしは毎日悩んでおるのじゃ、ジェイムズよ。この戦争のせいで、ひょっとすると商売が駄目になっちまうんじゃないかと思うと怖くなる。プレイフェア商会が脆弱だというわけじゃないぞ。ただ、取引先が倒産しちまうかもしれないのぞ。ああ！　アメリカの連中め、奴隷制の支持者であれ、廃止論者であれ、みんなまとめて消え失せちまうがいい！」

いついかなる場所においても個人的な利害よりも上位に置かれるべき人道という大原則からすれば、ヴィンセント・プレイフェアがこんなふうに話すのは間違っていたが、純粹に商売の観点のみを考慮するのであれば、彼は正しかった。アメリカの輸出品の中で最も重要な原材料が、グラスゴーの市場では不足していたのである。強烈な英語表現を用いるならば、綿花飢饉¹⁶⁾が、日を追うにしたがって徐々に脅威の度合いを増してきていた。何千人もの労働者が、公的な支援にすがって生活することを余儀なくされていたのである。グラスゴーには2万5000台の力織機があり、合衆国での戦争が始まる前は、1日に62万5000メートル、すなわち年間5000万ポンドもの綿糸を生産していた。これらの数字から、織物の原料が突如としてほぼ完全に欠乏してしまった際に、街の産業活動にもたらされる混乱の度合いはいかばかりか、とご想像いただきたい。倒産はほぼ1時間ごと

16) 〔原註——〔フランス語原文の「la famine du coton」は英語の〕「the cotton famine」の逐語訳。〕なお、強調はヴェルヌによるもの。

に発生していた。あらゆる工場で業務の停止が起こっていた。労働者たちは餓死しそうだった。

そんな凄まじい貧窮状態を目の当たりにしたことで、ジェイムズ・プレイフェアはあの大胆不敵な計画を思いついたのである。

「綿花を探しに行ってきます」と彼は言った。「是が非でも持って帰りますよ」

とはいえ、ヴィンセント伯父さんと同じく彼もまた「^{ネゴシアン}商人」¹⁷⁾だったので、交換によって事を進めることにし、商取引のかたちでの作戦を提案しようと心に決めていた。

「ヴィンセント伯父さん」と彼は言った。「ぼくの考えを申しましょう」

「どれどれ、どんなものだろうね」

「じつに単純です。船足が速くて、荷をたくさん積み込める船を1隻造らせるんです」

「そりゃ実現可能だね」

「その船に、軍需品、食料、衣類を積み込みます」

「そりゃお安い御用だね」

「その蒸気船の指揮は、ぼくが執ります。連邦海軍のどの船が来ても、競走では負けません。南部の港のどこかで封鎖を破ってやります¹⁸⁾……」

「積み荷を必要としている南部の連中に高く売りつけてやろうというんだな」と伯父が言った。

「で、綿花をいっぱい積んで、戻ってくるんです……」

17) 原語の「négociant」は、文字通りには「商取引を行う人」すなわち「商人」の意だが、実際には商店主などの小売商ではなく、比較的大規模な商売を手がける卸売商、貿易商などを指すことが多い。拙訳では、文脈ごとに「商人」あるいは「貿易商」の訳語をあてている。

18) アメリカの南部諸州は農業は盛んだが工業力に乏しく、軍需品については海外からの輸入に頼らざるを得なかった。そのため、南北戦争中、海軍力において勝る北軍は、南軍の支配下にある港湾都市に対して海上封鎖を行い、綿花の輸出や武器弾薬の輸入を阻止することで戦局を優位に進めた。

「二束三文で譲ってもらったやつをな」

「おっしゃるとおりです。こんなところでよろしいでしょうか？」

「いいだろう。だが、突破できるのかね？」

「できるはずですよ。いい船さえあれば」

「特別に造らせるとしよう。だが、乗組員は？」

「なあに！ 見つかりますよ。わんさか必要なわけじゃない。船が操ればいいんです。北軍と戦うわけじゃなくて、ぶっちぎってやればいいだけですから」

「よし、ぶっちぎってこい」断固たる口調でヴィンセント伯父さんが応じた。「じゃあ、教えてくれ、ジェイムズよ、アメリカの沿岸のどこを目標にいくつもりなんだ？」

「これまでも何隻かの船が、ニューオーリンズ¹⁹⁾、ウィルミントン²⁰⁾、サヴァナ²¹⁾の封鎖を突破しています。でも、ぼくとしては、チャールストン²²⁾にまっすぐ入っていこうと思っています。英国の船は、バミューダ号を除けば、これまで1隻たりともチャールストンの水路に入りこむことができていません。ぼくはバミューダ号のようにやろうと思っています。こちらの船の喫水が浅いので、北軍の船が追って来られないようなところを行くつもりです」

「たしかに」とヴィンセント伯父さんが言った。「チャールストンでは綿花があり余っているようだな。処分に困って燃やしているくらいだから」

「そのとおりです」とジェイムズ。「そのうえ、街はほぼ完全に包囲され

19) ルイジアナ州南部にある港湾都市。ミシシッピ川の河口に位置する。

20) ノースカロライナ州南部にある港湾都市。ケープ・フィア川の河口に位置する。

21) ジョージア州南東部にある港湾都市。

22) サウスカロライナ州南東部にある港湾都市。南北戦争開始以前、チャールストンの港からは、綿花、染料、米など、南部の主要生産物がヨーロッパへと輸出され、その一方で、アフリカからは大量の奴隷が輸入されていた。また、チャールストンにはアメリカ合衆国最大の奴隷市場があった。

ています。ボーリガード²³⁾のところは弾薬不足ですから、ほくの積み荷をものすごい高値で買い取ってくれるでしょう」

「よし、いいだろう！ で、出発はいつがいいのかね？」

「半年後です。突破の難易度を下げるためには長い夜が、冬の夜が必要ですからね」

「それまでに造ってやろうじゃないか」

「約束ですよ、伯父さん」

「ああ、約束だ」

「他言無用ですね？」

「そのとおり！」

かくしてその5か月後に、蒸気船デルフィン号はケルヴィン・ドックの造船作業場から進水することになるわけだが、上に述べたような次第で、その真の目的地を知る者は誰もいないのであった。

Ⅱ 出港準備

デルフィン号の艀装作業は速やかに進んだ。索具類の準備も済んでいた。あとは調整するだけだ。デルフィン号にはスクナーのマストが3本付いていたが、それはほぼ無益な贅沢品だった。というのも、北軍の巡洋艦から逃れるのにあてにしていたのは風ではなく、船腹に収めている強力な蒸気機関だったからだ。そして、その方針は理にかなっていた。

12月の終わり頃、デルフィン号は試運転のためにクライド湾へと向かった。建造者と船長のどちらがより大きな満足感を覚えていたか、それを言い当てるのは不可能である。新造の蒸気船は見事に航走し、曳航測程儀^{バテント・ログ²⁴⁾}

23) P・G・T・ボーリガード (Pierre Gustave Toutant Beauregard, 1818-93)。ルイジアナ州出身の軍人であり、南軍の将軍。1861年4月12日のサムター要塞攻撃の指揮を執り、この要塞を3日で陥落させた。本作品の物語が展開する時期には、実際にサウスカロライナ州の沿岸警備を任されていた。

24) [原註——目盛の付いた文字盤の上を動く針によって船舶の速度を示す計

は時速 17 海里²⁵⁾を示したのだが、それは、それまでに一度としてイギリス、フランス、アメリカの船舶によって得られたことのない速度だった。海上での競走であれば、最速の部類に入る艦艇を相手にしたとしても、デルフィン号はまちがいなく何挺身もの差をつけて勝利していたことだろう。

12月25日に荷積みが開始された。蒸気船はスチーム・ボート河岸^{キー}にやって来て接岸したが、そこは河口に至るまえにクライド川に架かる最後の橋、グラスゴー・ブリッジ^{ワーフ}のやや下流にあった。そこでは広大な埠頭に莫大な量の衣類、武器、弾薬の備蓄が収納されており、それが速やかにデルフィン号の船倉に移されていった。この積み荷の正体が船の謎めいた目的地を隠さず暴露していたため、プレイフェア商会はもうそれ以上は秘密を守ることができなかった。が、そもそもデルフィン号は遠からず出航する予定だったのである。それまでのところ、アメリカの巡洋艦は1隻たりとも英国の海域でその姿を確認されてはいなかった。それに、乗組員の団を組織しなければならないというときに、長々と沈黙を守ることなどできただろうか？ 目的地を知らせずに男たちを雇い入れることなど不可能である。何と言っても自分の命を危険にさらすことになるわけだし、これから命の危険を冒そうというときには、それがどのような理由と方法によるものなのかを知りたくなるのが人情というものだからだ。

とはいえ、この見通しのために尻込みする者は一人もいなかった。給料がいうえ、この作戦^{オペレーション}では各人が利益の配分にも与れることになっていたからだ。そのため、船乗りたちが大挙して押し寄せたのだった——しかも、きわめて優秀な連中が。ジェイムズ・プレイフェアは、選択肢が多すぎて困るばかりだった。それでも巧みに選び出し、丸一日が経つ頃には、

器。] 船の航走距離や速度を測定するための計器。パドルホイールと呼ばれる細長い回転翼（羽根車）をロープの先に取り付けて船尾から曳航し、その回転数を計測することで船の航走距離を算出する。

25) [原註——7 と 100 分の 87 里に相当。1 海里は 1852 メートル。]

船員名簿に水夫30名の名前が登録されていたのだが、それは〈いとも慈愛深き女王陛下〉のヨットにさえ面目を施していたであろう、というようなメンバーだった。

出航は1月3日と決まった。12月31日にはデルフィン号は準備ができていた。船倉には弾薬と食糧が、燃料庫には石炭がいっぱいに積み込まれていた。デルフィン号を引き留めるものはもう何もなかった。

1月2日に船長^{スキッパー}が乗り込み、自分の船に、船長としての最後の確認の視線を巡らせていると、一人の男がデルフィン号の舷門²⁶⁾に現れて、ジェイムズ・プレイフェアに話したいことがあるのだが、と言った。船員の一人がその男を船尾楼まで案内してきた。

それは、肩幅が広く、筋骨隆々たる偉丈夫で、血色もよく、どこことなく間の抜けた様子の裏にはある種の明敏さと陽気さが透けて見えていた。海上の慣わしには疎いようで、船の甲板を訪れる機会をほとんど持たぬ男らしく、周囲をきょろきょろと眺め回していた。が、一方で、ベテランの船乗りであるかのような物腰を身につけてもおり、デルフィン号の艤装をじろじろと見たり、水夫特有のやり方で体を左右に揺すったりもしていた。

船長の面前まで来ると、男は目の前の人物をじっと見据えてこう言った。

「ジェイムズ・プレイフェア船長ですか？」

「そうだが」と船長^{スキッパー}が答えた。「何の用だ？」

「この船に乗りたいんです」

「もう空きはないよ。乗組員はそろっている」

「なんですって！ あと一人増えたところで、お困りになることはないでしょうに。むしろ、その方が好都合なんじゃないですか」

「そう思うかね？」相手を真正面からじっと見据えながら、ジェイムズ・プレイフェアが言った。

26) 船腹に作られている船の出入口。

「そりゃそうですよ」と水夫が答えた。

「だが、おまえさんは何者なんだ？」と船長が尋ねた。

「鍛え抜かれた船乗りでさあ。その点に関しちゃあ、請け合います。筋骨逞しい快男児で、覚悟の決まった熱血漢。俺がいま、謹んでご提供いたします、と申し上げているこいつらみたいに力強い2本の腕は、船の上では馬鹿にできない代物だと思いますがね」

「しかし、船といったらデルフィン号だけじゃないし、ジェイムズ・プレイフェア以外にも船長はたくさんいる。どうしてここに来たんだ？」

「デルフィン号で、ジェイムズ・プレイフェア船長のご命令のもとで、働きたいからです」

「こっちでは、おまえさんを必要としているわけではないんだがね」

「腕っぷしの強い男ってのは、いつだって必要になるもんですよ。もし俺の力を証明するために、おたくの船員の中から選りすぐりの剛の者を3、4人出して俺を試そうっていうんなら、こっちは準備ができていませう！」

「めちゃくちゃな奴だな！」とジェイムズ・プレイフェア。「で、おまえさんの名前は？」

「クロクストンです、どうぞよろしく」

船長は何歩か後ろに退がり、かくも「直截的な」やり方で自分を売り込んできたこのヘラクレスばりの大男をさらによく検分しようとした。この水夫の物腰、上背、外見は、頑健さに関する彼の自負を否認するようなものではなかった。並外れた力の持ち主であるにちがいない、怖いもの知らずなのだ、ということが感じられた。

「これまでは、どんなところを航海してきた？」とプレイフェアが尋ねた。

「あっちこっち、いろんなところでさあ」

「だが、デルフィン号が向こうで何をする予定なのか、分かっているのか？」

「ええ、だからこそ、行きたくなかったわけで」

「じゃあ、おまえさんのような男をみすみす逃したら、ぼくなどは神に呪われてしまえ、ということになるな！ 副船長のミスター・マシューを見つけて、船員として登録してもらってこい」

そう言うと、ジェイムズ・プレイフェアはこの部下が踵を返し、船首の方へ駆け出していくものとばかり思っていたのだが、それは間違いだった。クロクストンは動かなかったのである。

「おい、ぼくの言うことが聞こえたか？」と船長が尋ねた。

「ええ」と水夫が答えた。「でも、話はそれだけじゃないんです。ほかにもご提案申し上げたいことがありますて」

「やれやれ！ 困った奴だな」とジェイムズがつっけんどんに答えた。「おしゃべりなんかで時間を無駄にするわけにはいかないんだが」

「そんなに長くはかかりませんよ」とクロクストンが続けた。「あと一言だけです。申しましょう。俺には甥っ子がいるんです」

「いい叔父さんをもったものだね、その甥御さんは」とジェイムズ・プレイフェアが応じた。

「へっへっへっ」とクロクストン。

「いい加減に、最後まで話してくれないかね？」苛立ちを募らせながら船長が訊いた。

「ええと、こういうことなんです。叔父の方を雇ったんなら、ついでに甥の方も何とかしてくださなきゃってね」

「へえ！ そんなものなのかね！」

「ええ！ そういう慣わしでさあ。片っぼだけなんて、あり得ねえんで」

「それで、おまえさんの甥というのは？」

「15歳の見習い水夫で、俺がいま仕事を教えています。やる気十分だから、いまに立派な船乗りになるでしょうね」

「こらこら、クロクストン先生」とジェイムズ・プレイフェアが声をあげた。「おまえさん、デルフィン号を少年水夫の学校か何かと勘違いして

いるんじゃないかね？」

「少年水夫のことを悪く言うのはやめましょうや」と船乗りが言い返した。「中にはネルソン提督²⁷⁾になった奴もいるし、フランクリン提督²⁸⁾になった奴もいるんだから」

「なるほど、そりゃそうだな！」とジェイムズ・プレイフェア。「おまえさんの話しぶり、気に入ったよ。甥っ子を連れてこい。でも、もしも叔父さんの中に、おまえさんが自分で言うような筋骨逞しい快男児が見つからなかった場合には、その叔父さんの方は、ぼくと事を構えることになるぞ。行け、そして1時間後には戻ってきているように」

クロクストンは即座に指示に従った。デルフィン号の船長にかなりぎこちなく敬礼をし、それから河岸へと戻った。1時間後、甥を連れて船に戻ってきたのだが、その甥というのは14、5歳の少年で、少々か細く、少々ひ弱であり、小心者でおどおどしている様子。精神的な図太さと肉体的な力強さに関しては、叔父に似ているようには見えなかった。クロクストンでさえ、いくらか優しい励ましの言葉をかけて彼の気を奮い立たせてやらなければならないかったほどだ。

「さあさあ」と彼は声をかけていた。「しっかりしなきゃ！ 俺たちを取って食おうっていうわけじゃないんだから、がんばれ！ それに、引き返すんなら、まだ間に合うぞ」

「いやです、いやです！」と若者は答えた。「神様、どうかぼくたちをお守りください！」

その日のうちに、デルフィン号の船員名簿には水夫クロクストンと見習い水夫ジョン・スティッグスの名前が登録されていた。

翌朝の5時に、蒸気船の火が思いきり強められた。甲板はボイラーの振

27) アメリカ独立戦争、ナポレオン戦争などで活躍した英国海軍の提督ホレーショ・ネルソン (Horatio Nelson, 1758-1805) のこと。

28) 英国海軍の将校であり北極探検家でもあったジョン・フランクリン (John Franklin, 1786-1847) のこと。

動を受けてカタカタと震え、蒸気は鋭い音を立ててバルブから漏れ出していた。出発の時刻が来ていた。

早朝だというのに、河岸にもグラスゴー・ブリッジにも相当な数の群衆がひしめいていた。勇敢な蒸気船に、最後にもう一度だけ別れを告げに来ていたのだ。ヴィンセント・プレイフェアもジェームズ船長と抱擁を交わすために来ていたが、彼はこのようなときであっても古き良き時代の古代ローマ人のように振舞った。つまり、英雄的な態度をとり、甥に2度、心のこもった接吻をしてやったのだが、それは強靱なる魂の証だった。

「行っておいで、ジェームズ」と彼は若き船長に言った。「さっさと行って、それ以上にさっさと帰ってくればいい。特に、自分の立場をうまく利用するのを忘れちゃいけないよ。高く売って、安く買う——それができれば、おまえは伯父さんの敬意を勝ちとることになるだろうね」

『完全無欠の商人のための手引書』^{ネゴシアン}からの借りものであるこのアドバイスが口にされた直後に伯父と甥は別れ、見送りの客たちも全員船を降りていった。

その同じ頃、クロクストンとジョン・スティッグスは船首楼でお互いのそばにいたのだが、前者は後者にこんなことを述べていた。

「いいぞ、いいぞ！ 2時間もしないうちに俺たちは海に出ているだろうし、こんなふうには始まる旅は、いいものになるに決まっている！」

返事をする代わりに見習い水夫はクロクストンの手を握った。

そのとき、ジェームズ・プレイフェアは出航のための最後の指示を出していた。

「蒸気圧は十分ですか？」と副船長に尋ねると、

「ええ、船長」とミスター・マッシュューが答えた。

「では、^{もや} ^{づな} 舳い綱をほどいてください」

作業はただちに行われた。スクリューが始動した。デルフィン号が動き出し、港の船舶のあいだを通過した。そして、なおも歓声をあげながら見

送ってくれている群衆の視界からも、まもなく消えた。

クライド川の川下りは難なく行われた。この川は、人の手になる作品だ、と、それどころか名匠の手になる作品なのだと言ってもいい。60年来、幾多の浚渫船と絶えまない浚渫作業のおかげで15ピエ〔約5m〕もの深さを獲得し、市街地の河岸のあいだの横幅も、3倍にまで拡大されていたのだ。マストと煙突の森は、じきに煙と靄の中に見えなくなった。鑄造所でのハンマーの音や、造船所での手斧の音も、距離が離れるにつれて消えていった。パトリックの村のあたりまで来ると、工場に代わってカントリー・ハウスが、ヴィラが、別荘が立ち並んでいた。デルフィン号は、蒸気のエネルギーを抑えながら、川岸よりも高い位置で川を挟みこんでいる堤防のあいだで何度も旋回していた。また、ずいぶん狭い水路の中で旋回することも多かった。狭さなど、たいした問題ではなかったのである。というのも、船が通れるような川について言えば、横幅よりも水深の方が、船にとってはありがたいものだからだ。くだんの蒸気船は、アイルランドの海で働くあの優秀な水先案内人の一人に導かれて、水に浮かぶブイのあいだを、また、航路を示す標識灯を戴く石塚²⁹⁾や石柱のあいだを、ためらうことなく航走していた。船はじきにレンフルーの街を通り過ぎた。すると、キルパトリックの丘のふもと、ボウリング湾を目前にして、クライド川の横幅が広がり、その湾の奥に開けているのが、エンジンバラとグラスゴーとを結ぶ運河の入口だった。

さらに行くと、地上400ピエ〔約130m〕のところにダンバートン城がそのシルエットを聳え立たせているのだが、それは薄靄の中にあってもほとんど霞んではいなかった。また、それからほどなくして左岸では、グラスゴーの港の船舶がデルフィン号の波を受けて踊った。さらに数マイル行くと、ジェイムズ・ワット³⁰⁾の故郷たるグリーンノックを通り過ぎた。する

29) 〔原註——小さな石塚のこと。〕

30) ジェイムズ・ワット (James Watt, 1736-1819)。スコットランドの技師・発

と、デルフィン号はクライド川の河口にまで、また、クライド川が北の運河へと水を注ぎ入れている大きな湾の入口にまで来ていた。船は、そこで初めて海の波のうねりを感じ、まるで絵のように美しいアラン島の海岸に沿って航行した。

最後には、海峡を横切るようなかたちで伸びているキンタイア岬をぐるりと回った。ラスリン島が視認された。水先案内人はボートに乗り、沖を遊弋している小さな帆船³¹⁾へと戻っていった。デルフィン号は船長の指揮下に戻り、アイルランドの北側を通る、船の比較的混み合わないルートを選った。そして、視界からはまもなくヨーロッパ大陸の端までもが消え去り、船は大西洋上にただ1隻となった。

Ⅲ 洋上にて

デルフィン号は優秀な乗組員を擁していた。戦闘に長けた船乗りではなく、敵船に乗り込んでいくような水兵でもないが、船を操るのに優れた男たちだった。それ以上の能力など、必要とされていなかったのだ。この屈強な男たちは、皆、覚悟のある連中だが、多少の差はあるにせよ、全員がネゴシアン商人だった。追い求めているのは栄光ではなく、財産だったのである。彼らには、誇らしげに示すべき旗も、砲声とともに掲げるべき国籍旗もなかった。そもそも、船に積んでいる大砲にしても、もっぱら信号を発するのに用いる小さな艦載砲が2門、それで全てだったのである。

デルフィン号は高速で航行していた。建造者たちと船長の期待に応え、英国海域の境界線をもすぐに越えてしまった。また、視界には1隻の船も見当たらなかった。大西洋上の大幹道が、がら空きになっていたのである。そもそも北部連邦の海軍のいかなる船であれ、英国旗のもとにある以上は、

明家であり、グリーンノック出身。蒸気機関の改良によって産業革命の発展に貢献した。

31) 1本マストの快速小型帆船。

デルフィン号を攻撃することはできなかった。追跡するだけであれば、問題ない。封鎖線の突破を阻止することができれば、御の字だろう。だからこそ、ジェイムズ・プレイフェアは追跡されるのを回避する、というそのために、すべてを犠牲にしつつ、船の速度を上げていたのだった。

ともあれ、船上では厳重な監視が行われていた。寒くはあれど、つねに誰かがマストの上に詰めており、水平線上にわずかでも帆が見えたら皆に知らせよう、と身構えていた。夜が来ると、ジェイムズ船長はミスター・マシューに厳密きわまりない指示を与えた。

「見張りを横桁^{バール}³²⁾に置いておく時間が長すぎではいけない」と彼は副船長に言った。「寒さに凍えてしまうかもしれないし、そんな状態では、きちんとした見張りにはできないですからね。部下を頻繁に交替させてください」

「了解です、船長」とミスター・マシューが答えた。

「この仕事にはクロクストンが打ってつけだと思います。ものすごく目がいいと自分で言っているし、それが本当なのかどうか、試してみる必要があります。朝の当直班に入れておいてください。早朝の薄霧を監視させるんです。何か新しいことが起こったら、ほくに知らせてください」

そう言うと、ジェイムズ・プレイフェアは自分の船室に戻っていった。ミスター・マシューはクロクストンを呼び出して船長の命令を伝えた。

「明日の6時に」と彼は言った。「^{フォアマスト}前檣^{バール}の横桁の見張り台に行くんだぞ」

クロクストンは返事の代わりに唸り声を洩らし、それはいかにも分かりましたと言っているかのように聞こえた。が、ミスター・マシューが背を向けるや否や、この船乗りは意味の分からない言葉をあれこれとつぶやき、しまいにはこんなことを大声でのたまうのだった。

32) 原語は「barres」。英語や日本語では「クロスツリー (crosstrees)」と呼ばれる。厳密にはシュラウド（マストを左右から支えるロープ）を固定するためにマスト上部に設置される横桁を指すが、デルフィン号ではその横桁の辺りに据えられた見張り台そのものが「barres」と呼ばれているようである。

「^{フォアマスト}前^{バール}檣の横桁って、いったい何のことだろう？」

そのとき、甥のジョン・スティッグスが船首楼まで彼に会いに来た。

「おや、どうかしたんですか、クロクストンおじさん？」と彼は言った。

「なあに！ 順調！ 順調さ！」無理に笑顔を作りながら船乗りが答えた。

「問題は一つだけ！ この厄介な船が、川から上がったばかりの犬みたい
にブルブル体を揺するもんだから、ちと気分が悪くなっちまったのさ」

「かわいそうに！」心からの感謝の気持ちをこめてクロクストンを見つめながら、見習い水夫が言った。

「それにしても」と船乗りが続けた。「こんな歳になって、迂闊にも船に酔うってんだからな！ なんて弱っちい男なんだ、俺は！ だが、慣れるだろう！ 慣れるはずだ！ あと、^{フォアマスト}前^{バール}檣の横桁とやらも、困ったもんだが……」

「大切なクロクストン、ぼくのために……」

「あなたのためでもあり、あの方のためでもある」とクロクストンが答えた。「でも、それについては何も言わないことだ、ジョン。神様を信じよう。あなた方を見捨てたりはなさらないはずだ」

こんな言葉を交わしてからジョン・スティッグスとクロクストンは船員室に戻ったのだが、船乗りは、見習い水夫の若者が自分専用の狭い^{キャビン}船室の中に穏やかに身を横たえるのを確認してからようやく眠りについたのだった。

翌朝6時にクロクストンは起床して持ち場へと向かった。甲板に上がると、副船長から、マストにのぼってしっかり見張りをしてこい、という命令を受けた。

この言葉を聞いた船乗りは、少しばかり心を決めかねているようなそぶりを見せた。ついで、決断を下すと、デルフィン号の船尾の方へ向かっていった。

「おいおい、いったいどこへ行くんだい？」とミスター・マシューが声をあげた。

「行けと言われているところです」とクロクストンが答えた。

「^{フォアマスト}前^{バール}檣の横桁へ行けと言っているんだぞ」

「はいはい！ 行きますとも」と水夫は落ち着いた口調で答え、船尾楼の方へ歩き続けた。

「ふざけてるのか？」苛々しながらミスター・マッシューが続けた。「おまえさん、^{ミズンマスト}後^{フォアマスト}檣の上の方に^{バール}前^{バール}檣の横桁を探そうっていうのかい。見たところ、小綱を編むのもロープを撚り継ぐのもうまくできない^{コックニー}都会っ子³³⁾も同然じゃないか！ いままでいったいどんな^{はしけふね}舩船に乗ってきたんだ？
^{フォアマスト}前^{フォアマスト}檣だ、馬鹿め、^{フォアマスト}前^{フォアマスト}檣だって言ってるだろうが！」

副船長の言葉を聞いて駆けつけてきた甲板員の水夫たちは、船首楼の方へ戻ってくるクロクストンの取り乱した様子を見て、思いきり笑い出さずにはいられなかった。

「こんなのを」と彼はマストを凝視しながら言った。そのてっぺんはまるで見えず、朝靄の中に姿を消していた。「こんなのを、あんなに高いところまでよじ登らなきゃいけないのか？」

「そうだともし」とミスター・マッシューが答えた。「さあ、急げ！ 聖パトリック³⁴⁾に誓って言うが、この怠け者が持ち場につくまでに、北軍の船には、^{バウスプリット}船首斜檣をわれわれの索具にぶち込む時間だってあるだろうよ³⁵⁾。いい加減にして、そろそろ行ってくれないかね？」

クロクストンは一言も口にすることなく、どうにかこうにか手すりの上^{ラットライン}にのぼった。それから^{ラットライン}段索をよじ登り始めたのだが、その登り方は驚く

33) 原語「cockney」の原義は「雄鶏の卵」、すなわち「雄鶏に生み落とされたかのような不格好な卵」。そこから意味が拡張されて、「ひ弱に育てられた子ども」、「生活力に乏しい都会人」、「ロンドンっ子」などを表すようになった。

34) アイルランドの守護聖人。

35) ^{バウスプリット}船首斜檣とは、帆船の船首から斜め前方に突き出た棒材のこと。その先端には船首三角帆のロープを結ぶ。なお、マストはもちろんのこと、索具が切断・破壊されても帆船は航行不能に陥るので、当時の海戦では索具を標的とする攻撃も行われた。

ほど拙く、まるで自分の手足の使い方も分かっていないかのようだった。ついで、前檣楼³⁶⁾まで着くと、軽やかにそちらに飛び移る代わりにじっと動かなくなり、めまいにとらわれた人間特有の力強さでもって操帆具にしがみついていた。ミスター・マシューはこのあまりにも無様な様子に啞然とすると同時に怒りが沸きあがってくるのを感じ、すぐに甲板に降りてこい、と命じた。

「あいつは」と副船長が水夫長に言った。「生まれてこのかた、船乗りだったことなど一度もありはせんな。ジョンストン、あいつが鞆の中に何を入れているのか、ちょっと見てきてくれ」

水夫長は急いで船員室へと向かった。

その間も、クロクストンは降りようと悪戦苦闘していた。が、足を滑らせて動索の1本にしがみついたところ、それが端の方からほどけてしまい、かなりの勢いで甲板に落下した。

「ドジ、大馬鹿野郎、淡水専門の船乗りめ！」ミスター・マシューが慰めの言葉をかける代わりにそう怒鳴った。「デルフィン号に乗り込んで、いったい何がしたいっていうんだ？ まったく！ おまえは自分のことをタフな船乗りだと言っていたが、フォアマスト ミズンマスト前檣と後檣の区別だってできやしないんじゃないか！ やれやれ、ちょっと話し合う必要があるな」

クロクストンは言い返さなかった。すべてを受け容れようと観念し、非難の鞭に背を差し出していたのだ。ちょうどそのとき、水夫長がガサ入れから戻ってきた。

「こちらをどうぞ」と彼は副船長に言った。「こいつの鞆の中に見つかったのは、これだけでした。手紙が何通も入った、怪しい札入れです。」

「どれどれ」とミスター・マシュー。「北部合衆国の消印の付いた手紙じゃないか！ 「ボストン在住、ミスター・ハリバート」！ 奴隷制廃止

36) フォアマスト 前檣の上部に設けられた半円形の見張り台。

論者だ！ 北部の人間だな！……ならず者め！ おまえは単なる裏切り者だ！ この船に紛れこんで、俺たちを裏切ろうとしていたんだ！ 安心するがいい！ おまえはもう終わりだ、九尾の猫³⁷⁾の爪を味わうことになるんだからな！ 水夫長よ、船長に知らせてくれ。それまでのあいだ、おまえたちはこの下衆野郎を見張っている」

こんなお褒めの言葉を頂戴したクロクストンは、年老いた悪魔のような渋面をつくっていたが、その唇は固く閉じられたままだった。キャプスタン³⁸⁾に縛りつけられていたので、手も足も動かすことはできなかった。

その数分後、ジェイムズ・プレイフェアが船室を出て、船首楼の方へ向かった。すぐにミスター・マシューが船長に事の次第を知らせた。

「何か申し開きはあるか？」苛立つ気持ちをかろうじて抑えながら、ジェイムズ・プレイフェアが尋ねた。

「いいえ、何も」とクロクストンが答えた。

「それじゃあ、何をするためにこの船に乗り込んだんだ？」

「何も」

「それじゃあ、ぼくにいま何を期待している？」

「何も」

「それじゃあ、おまえはいったい何者なんだ？ アメリカ人だな？ ここにある手紙がそれを証し立てているようだが」

クロクストンは返事をしなかった。

「水夫長」とジェイムズ・プレイフェアが言った。「鞭打ち 50 回で、この男に口を割らせてくれ。それで足りるかな、クロクストン？」

「さあ、どうでしょうね」見習い水夫ジョン・スティッグスの叔父が、眉一つ動かさずに答えた。

37) [原註——〔フランス語原文の「chat à neuf queues」は〕「cat of nine tails」の逐語訳。9本の革紐からなる鞭のことであり、英国海軍では非常によく使われている。]

38) 船の錨の鎖を巻きあげる装置。

「よし、やれ、おまえたち」と水夫長が言った。

この命令を受けて、屈強な水夫が二人、クロクストンのウールのジャケットを脱がせに来た。二人はすでに例の恐るべき道具を手にしており、受刑者の肩の上に振りあげていた。が、そのとき、見習い水夫のジョン・スティッグスが、顔面蒼白、弱りきった様子で甲板に飛び出してきた。

「船長さん！」と彼は言った。

「ああ！ 甥の方だな！」とジェイムズ・プレイフェア。

「船長さん」自分を抑えようと猛烈な努力をしながら見習い水夫が続けた。「クロクストンが言いたがらなかったことを、ほくが代わりに申しましょう！ この人がなおも黙秘しておきたがっていることを、包み隠さず申し上げます。そうです、彼はアメリカ人、ほくもまたアメリカ人です。二人とも、奴隷制を支持する側の敵ではありますが、デルフィン号を裏切って北軍の船に売り渡すために乗ってきた裏切者ではありません」

「ならば、何をしに来たのかね？」と厳しい声で船長は尋ねた——見習い水夫を注意深く観察しながら。

若者は、答える前にしばし躊躇し、ついで、かなりしっかりした声でこう言った。

「船長さん、できれば一対一でお話したいのですが」

ジョン・スティッグスがこんな望みを口にしてはいるあいだも、ジェイムズ・プレイフェアは念入りに彼を注視し続けていた。見習い水夫の若々しく柔和な顔つき、やけに耳触りのよいその声、両の手の細さと濃褐色³⁹⁾のひと塗りでは隠しきれていない肌の白さ、活き活きとしてはいるが、だからといって温和さが薄められているわけではないその大きな目、それらすべてが相まって、船長の頭の中にはある考えが浮かんだのだった。ジョン・スティッグスが頼みごとを言い終えると、プレイフェアは肩をすくめ

39) 煤と少量のゴムとを混ぜて作る濃褐色の絵具。水彩、油彩、ペン画の下絵に用いられた。

ているクロクストンをじっと見つめた。ついで、見習い水夫の方に物問いたげな視線を向けたのだが、若者の方ではその視線に耐えきれず、目をそらした。そこで、船長は一言だけこう言った。

「来たまえ」

ジョン・スティッグスは船長のあとについて船尾楼へ行き、ジェイムズ・ブレイフェアはそこで自分の船室のドアを開けながら、緊張のせいで頬が青ざめている見習い水夫にこう言った。

「どうかお入りください、お嬢さん」

不意にそんなふうに声をかけられて、ジョンは顔を赤らめた。そして、心ならずもふたすじの涙がその両の目から流れ落ちた。

「ご安心ください、お嬢さん」先ほどよりも優しい声で、ジェイムズ・ブレイフェアが言った。「そして、どういうわけで、あなたを光栄にもこの船にお迎えできることになったのか、教えてください」

若い娘は少しのあいだ返事をためらった。ついで、船長のまなざしに安堵して、話すことに決めた。

「船長さん」と彼女は言った。「私はチャールストンにいる父のもとへ行く予定なのです。あの街は、陸上では包囲され、海路もまた封鎖されています。ですので、入り込む方法が思いつかなかったのですが、そんな折も折、デルフィン号が封鎖の突破を目論んでいる、ということを知りました。それで、この船に乗せていただいたのです。ご承諾いただくことなく行動してしまったことについては、お詫びします。でも、仮にお願いしていたとしても、お断りになっていたでしょうね」

「たしかに」とジェイムズ・ブレイフェアが答えた。

「ということは、お願いしなかったのは、正しい判断だったわけです」さらにしっかりとした声で、娘が応じた。

船長は腕組みをして船室の中をひと巡りし、また戻ってきた。

「お名前は？」と彼は尋ねた。

「ジェニー・ハリバートです」

「クロクストンのところで押収された手紙の住所からすると、あなたのお父様はボストン在住ですね？」

「ええ、そのとおりです」

「ですが、合衆国の戦争のいちばん激しい時期に、北部の人が、そんなふうに南部の街にいるものなのでしょうか？」

「父は囚われの身なのです。たまたまチャールストンにいたときにこの内戦の火蓋が切られ、連邦^{ユニオン}の軍隊は南軍の手でサムター要塞⁴⁰⁾から追い出されてしまいました。父は、その政治的意見のせいで、奴隷制を支持する一派の憎しみの的となり、あらゆる権利が無視されたうえで、ボーリガード將軍の命によって収監されてしまったのです。そのとき、私は英国のとある親戚のところに厄介になっていたのですが、その女性もつい先日亡くなってしまいました。そのため、独りぼっちになり、わが家のいちばん忠実な召使であるクロクストン以外には頼れる者もなく、かくなるうえは父と一緒に、牢獄を共にしよう、と考えたのです」

「ミスター・ハリバートは、いったいどんな方なのですか？」とジェイムズ・プレイフェアが尋ねた。

「公明正大で勇敢なジャーナリストです」と誇らしげにジェニーが答えた。「トリビューン紙⁴¹⁾でいちばん立派な記者の一人であり、何に対しても臆することなく黒人の大義を守っていた人です」

「奴隷制廃止論者ですか！」と船長が激しい口調で叫んだ。「奴隷制を廃する、などという空疎な建前のもと、自分の国を血と瓦礫とで覆い尽くした連中の一人ですね！」

40) 1812～15年の米英戦争のあと、南部随一の貿易港であったチャールストンを防衛するために築かれた海上の要塞。1861年4月12日に南軍はこの要塞への砲撃を開始し、わずか3日で守備隊の隊長ロバート・アンダーソン少佐を降伏させた。これを機に、南北戦争が開始される。

41) [原註——奴隷制廃止のために尽力していた新聞。]

「船長さん」と青ざめながらジェニー・ハリバートが言い返した。「あなたは父を侮辱しておられます！ 父を擁護できる者はここには私しかいない、ということをお忘れになってはならないはずです！」

若き船長は額まで真っ赤になった。羞恥心の入り混じった怒りに捉えられたのだ。ひょっとすると、この娘に対し、情け容赦のない言葉を返してしまう寸前だったのかもしれない。だが、何とか踏みとどまり、船室のドアを開けた。

「水夫長」と彼は大声で言った。

水夫長がすぐに駆けつけた。

「今後、この船室はミス・ジェニー・ハリバートのものだ」と船長は言った。「船尾楼の奥に、吊り床を一つ準備しておいてほしい。ぼくにはそれで十分だから」

水夫長は、女性の名で呼ばれたこの年若い見習い水夫を啞然とした目で見つめていた。が、ジェイムズ・プレイフェアの合図を受けて、船室を出ていった。

「それでは、お嬢さん、これからは、ここがあなたのお住まいです」とデルフィン号の船長が言った。

そして、船室から出ていった。

IV クロクストンの悪だくみ

まもなく乗組員全員がミス・ハリバートの身の上を知ることとなった。クロクストンもそれを語るのに遠慮はしなかった。船長の命令によってすでにキャプスタンからは解放されており、九尾の猫も自分のねぐらに戻っていた。

「かわいげのある動物じゃないか」とクロクストンは言った。「特に、爪を隠しているあいだはな」

自由の身になるや、彼は船員室に降りていき、小型のトランクを手

取って、ミス・ジェニーのところまで運んだ。おかげで、娘はまた女性用の服を着ることができるようになった。が、彼女は自分の船室に引きこもり、再び甲板に姿を現すことはなかった。

かたや、クロクストンが英国近衛騎兵^{ハウスガード}でないのと同様に、船乗りでもない、ということは、紛れもない事実であると認定された。そのため、彼には船上での仕事をすべて免除してやらざるを得なくなった。

そんなことが起こっているあいだも、デルフィン号は大西洋を高速で航走し、その波を2本のスクリューでねじり上げていた。そのため、操船のための作業といっても、注意深く警備を行うことくらいしかなかった。ミス・ジェニーの正体を明るみに出したあの出来事の翌日、ジェイムズ・ブレイフェアは船尾楼甲板の上をせかせかと歩き回っていた。それまでのところ、娘にもう一度会って前日の会話を再開しよう、という試みはいっさい行われていなかった。

散歩中の彼と頻繁にすれちがっていたクロクストンは、満足げに顔をしかめながら、こっそりと相手の様子を窺っていた。話がしたい、という様子が見え見えで、しつこく見つめ続けていたため、しまいには船長を怒らせることになった。

「まったくもう、このうえさらに何をお望みだというんだ？」ジェイムズ・ブレイフェアがアメリカ人を呼びとめて言った。「泳ぎ手がブイの周りを回るみたいに、ぼくの周りをうろうろしているじゃないか。まだおしまいにはしてくれないのかね？」

「ごめんなさい、船長さん」とウインクしながらクロクストンが返事をした。「お伝えしたいことがあったもんですから」

「話してくれるかね？」

「なあに！ ごく単純なことですよ。率直にこう申し上げたかったんです。船長さんは、根っこの部分ではお優しい方だと」

「根っこの部分では、というのはどうしてだね？」

「根っこの部分も、表に出ている部分も、お優しい」

「おまえさんの褒め言葉なんて、欲しくはないよ」

「褒めているんじゃないです。期待しているんです。この賛辞に見合うくらいに、船長さんが徹底的にやり遂げてくださるのを」

「やり遂げるって、何を？」

「ご自分の任務です」

「なんだって！ ぼくには果たすべき任務があるっていうのか？」

「もちろんです。船長さんはわれわれを、つまりお嬢さんと俺を、船に乗せてくださいました。結構なことです。ご自分の船室をミス・ハリバートに譲ってくださいました。ありがたいことです。俺に対しては、鞭打ちの刑を免除してくださいました。じつに素晴らしい。これからわれわれをチャールストンまで、まっすぐに連れて行ってくださるご予定です。感謝に堪えません。でも、それだけじゃ駄目なんです」

「なんだって！ それだけでは駄目だと！」クロクストンの厚かましさに仰天してジェイムズ・プレイフェアが叫んだ。

「もちろんです」とずる賢そうな表情を浮かべながらクロクストンが答えた。「彼^かの地には、お父様が捕えられています！」

「それで？」

「ですから、そのお父様を救い出す必要があるでしょう」

「ミス・ハリバートのお父さんを救い出す？」

「そのとおりです。立派な方であり、勇敢な市民なのですから！ あの方のためになら、何がしかの危険を冒す価値があります」

「クロクストン先生」と眉をひそめながらジェイムズ・プレイフェアが言った。「ぼくの見たところ、おまえさんはまるで一流どころのお笑い芸人みたいだね。でも、このことはよく覚えておいてほしい。ぼくは冗談を言って笑う気分ではないんだ」

「誤解していっちゃいますよ、船長さん」とアメリカ人が言い返した。

「冗談など、まったく申してはおりません。ごく真剣にお話ししているんです。俺がご提案申し上げていることは、最初のうちは馬鹿げているように見えるかもしれませんが、よくよくお考えになってみれば、そうするしかないってことが、お分かりになるでしょう」

「なんだって！ ほくがミスター・ハリバートを助け出さなければならぬというのか？」

「そのとおりです。釈放してほしい、とボーリガード将軍に頼んでみてください。あちらも断りはしないでしょうから」

「だが、もし断ってきたら？」

「その場合には」と、もはや動じることもなくクロクストンが答えた。「強硬策をとることになりますね。南部の連中の見ている前で、囚人をさらってしまえばいいんです」

「ということは」と怒りに駆られ始めていたジェイムズ・プレイフェアが叫んだ。「ということは、北軍の艦隊を突っ切ってチャールストンの封鎖線を突破するだけでは満足できず、要塞の砲火を浴びながら、もう一度海に出ろというのか！ それも、ほくからすれば一面識もない御仁を、憎たらしい奴隷制廃止論者を、自分の血を流す代わりにインクばかり垂れ流している三文記者を救い出すために！」

「なあに！ 飛んでくる砲弾があと1発増えるか減るかっていう違いだけでさあ！」とクロクストンが付け加えた。

「クロクストン先生」とジェイムズ・プレイフェアが言った。「よく気をつけておいてくれ。おまえさんが不幸にも、もう一度いまの話を蒸し返してくるようなことがあれば、ほくは航海のあいだ中、おまえさんを船倉送りにして口のきき方をわきまえてもらおうと思っている」

船長はそう言ってこのアメリカ人を退がらせたのだが、アメリカ人の方では立ち去りながら、こんなことをつぶやいていた。

「よしよし、いまの談判はそんなに悪くなかったぞ！ 事が動き始めた！

順調だ！ 順調だ！」

「憎たらしい奴隷制廃止論者」という言葉を口にしたとき、ジェイムズ・ブレイフェアはまちがいで自分が思ってもいないことまで言ってしまった。奴隷制の支持者ではなかったが、合衆国での内戦で何よりも重要なのが隷従の問題であるとは認めたくなかったのだ。そして、それはリンカン大統領によるあの正式な声明の数々にもかかわらず、そうなのであった⁴²⁾。ということは、彼は、南部の諸州——36州のうちの8州⁴³⁾——は自ら進んで統合されたのだから、原理的には離脱する権利もある、と考えていたのだろうか？ いや、そんな考えすらなかった。北部の連中が嫌いだという、ただそれだけだったのである。彼は北部の人々を、共通の家族から離れていったかつての兄弟たちのように嫌っていた。彼、ジェイムズ・ブレイフェアがいまでは南部諸州に対して認めているのと同じことをした方がよいと——正真正銘の英国人であるにもかかわらず——〔独立戦争の折に〕判断したことで、嫌っていたのだ。デルフィン号の船長の政治的な意見は、以上のようなものだったのである。ともあれ、特にアメリカでのこの戦争は彼を個人的にも悩ませており、そのためジェイムズは、この戦争を遂行している人々に対しては恨みを抱いていた。したがって、南部の人々との密貿易を目論んでいた彼が、奴隷制の支持者⁴⁴⁾を救い出そ

42) エイブラハム・リンカン (Abraham Lincoln, 1809-65) は第16代アメリカ合衆国大統領であり、南北戦争時の北部連邦の陸海軍最高司令官。「正式な声明の数々」というのは、リンカンが1862年9月22日に発表した「奴隷解放予備宣言」や、1863年1月1日に公布・施行した「奴隷解放(最終)宣言」を指すか。

43) 南北戦争開始以前にアメリカ合衆国を構成していた34の州のうち、サウスカロライナ、ミシシッピ、フロリダ、アラバマ、ジョージア、ルイジアナ、テキサスの7州がまずは1861年2月までに連邦を離脱。ついで、南北戦争が始まると、ヴァージニア、テネシー、アーカンソー、ノースカロライナの4州が新たに南部連合に加わった。したがって、南部の州の数は8ではなく、11と考えるのが一般的である。

44) 原文には「*esclavagiste* (奴隷制の支持者)」とあるのだが、これでは文脈に合わない。自筆原稿や、雑誌『家庭博物館』(1865年10月号)に掲載されたバージョンを参照してみると、そのいずれにおいても「*esclavagiste*」の代わ

う、南部の人々を敵に回そう、という例の提案をどのように受け取らざるを得なかったかはご理解いただけるだろう。

そうこうしているあいだも、クロクストンの示唆は彼の心をちくちくと苛み続けていた。遠くへ投げ捨ててもクロクストンの言葉はたえず戻ってきて、彼の精神にしつこく圧をかけていたのだ。だから、その翌日、ミス・ジェニーがしばらくのあいだ甲板に登ってきたときも、彼女を正面から見つめるだけの勇気が彼にはなかった。

そして、言うまでもなく、それは非常に残念なことだった。というのも、知的で穏やかなまなざしをもつこの金髪の若い娘は、30歳の青年にじっと見つめられるのにふさわしい人物だったからだ。ところがジェイムズは、彼女の前に出ると気づまりを感じていた。この魅力的な女性は強靱で思いやりに満ちた魂の持ち主だが、その教育は不幸という名の学校で行われたものなのではないか、と感じていたのである。彼女に対して何も言わずにいるとしたら、それは彼女にとってのいちばん大切な願いを叶えてやることの拒否を意味するのだということを彼は理解していた。一方、ミス・ジェニーの方では、ジェイムズ・プレイフェアとことさらに近づきになるうとはしていなかったが、さりとて彼のことを避けていたわけでもなく、最初の何日間か、二人はほとんど、もしくはまったく口をきかなかった。ミス・ハリバートが船室から出てくることはあまりなかったので、クロクストンが両者を対決させようと ^{はかりごと} 謀をめぐらせていなかったら、彼女がデルフィン号の船長に言葉をかけることなど、まちがいがなく一度としてなかっただろう。

この殊勝なアメリカ人は、ハリバート家の忠実な召使だった。主人の屋敷の中で育てられ、その献身ぶりは限度というものを知らなかった。勇気があり、力が強いと同じくらい、分別も備えていた。そして、すでに見

りに「nordiste（北軍派）」という文脈に合った語が置かれているので、ヴェルヌは単行本収録のための改稿の際にミスをしてしまったものと思われる。

てきたとおり、彼には独自の物の見方があった。つまり、さまざまな出来事について、独特の哲学を築きあげていたのである。彼は、何かのせいで意気消沈するということがほとんどなく、このうえなく不利な局面にあってもじつに見事に窮地を切り抜ける術を心得ていた。

心根の優しいこの男は、ミスター・ハリバートを救い出し、船長の船と船長自身とをその救出に利用したうえで、英国に戻ろうと目論んでいた。それこそが彼の計画だったのだ——なにしろ娘には、父親と再会し、ともに捕虜になるということ以外には目的がなかったのだから。だからこそ、クロクストンはジェイムズ・プレイフェアを説き伏せようと攻めかかっていたのである。すでにご覧いただいたように、一斉射撃を行いはしたものの、敵方はまだ降参していなかった。むしろ、逆である。

「さあさあ」と彼は心の中でつぶやいた。「ジェニーお嬢様と船長さんには、最終的には何としてでも分かりあってもらわなくちゃ困る。航海のあいだ中、あんなふうに仏頂面でいられたんじゃ、成果はゼロだからな。あの二人には話し合いを、議論を、なんだったら口論だって、してもらわなくちゃいけないんだが、とにかく口をきいてほしいもんだね。そうなれば、その会話の中で——これは俺の首にかけて断言してもいいが——ジェイムズ・プレイフェアは、今日のところは拒否したことを、自分から進んで提案することになるはずさ」

ところが、娘と青年とがお互いを避け合っているのを目にしたことで、クロクストンは困惑し始めた。

「こりゃあ、不意打ちを食らわせてやらなきゃ駄目だな」と彼は考えた。

そして、4日目の朝、いかにもご満悦といった様子で揉み手をしながらミス・ハリバートの船室に入っていった。

「いいお知らせですよ！」と彼は大声で言った。「いいお知らせですよ！船長さんが何をご提案くださったか、絶対にお分かりにはならないでしょう。じつに立派な青年ですよ、まったく！」

「まあ！」とジェニーは返事をし、その心臓は激しく脈打った。「ご提案くださった、というのは？……」

「ミスター・ハリバートを救け出し、南部の連中のところからかつさらって、英国へお連れしてくださるそうです」

「本当なの？」とジェニーが声をあげた。

「お伝えしているとおりですよ、お嬢様。なんて心優しい男なんでしょうね、あのジェイムズ・プレイフェアってのは！ これぞまさしく英国人、彼らはものすごい悪人か、ものすごい善人か、どっちかなんです！ ああ！ 俺からの感謝の気持ちについては、当てにしておいてほしいところですね、あの船長さんには。身を粉にして彼に尽くしたっていいですよ、もしそれで喜んでくださるのならね」

クロクストンのこの話を聞いたジェニーの喜びは深かった。父を救い出す！ だが、彼女の方で、厚かましくもそんな計画を思いつくことは決してなかったはずだ！ それなのに、デルフィン号の船長は、彼女のために、自分の船と乗組員とを危険にさらそうと言ってくれているのだ！

「そういう男なんですよ」とクロクストンが話の締めくくりに付け加えた。「そしてそれは、ジェニーお嬢様、あなた様からの感謝のお気持ちにも充分に値するものでしょうな」

「感謝の気持ちなんかじゃ足りないわ」と娘が声をあげた。「永遠の友情です！」

そしてすぐに、心から溢れ出る感情をジェイムズ・プレイフェアに伝えようと船室を出ていった。

「ますます順調に進んでいるぞ」とアメリカ人はつぶやいた。「疾駆しているとっていい。そのうち目的地に着くだろうさ！」

ジェイムズ・プレイフェアは船尾楼の上を歩き回っていたのだが、娘が近づいてきて、感謝の涙で瞳を潤ませながら彼に手を差し出し、こう言うのを耳にして、ご想像のとおり、茫然自失した、とまでは言わないが、大

いに驚いたのだった。

「ありがとうございます、船長さん。ご尽力に感謝しています。異国の方にそんなお力添えをいただけるなんて、思ってもみなかった！」

「お嬢さん」と返事はしたが、船長には事情がのみこめておらず、またのみこめるはずもなかった。「いったい何のことだか……」

「でも、船長さん」とジェニーが続けた。「私のために多くの危険を冒すことにも、ひょっとすると、ご自分の利益を危うくすることにもなってしまいかもしれませんよ。私には何の権利もないというのに、船の中に寝泊まりする場所をご提供くださったり、これまでにもうさんざんお世話になっているというのに……」

「申し訳ありませんが、ミス・ジェニー」とジェイムズ・プレイフエアが引き取った。「本当に、あなたのおっしゃることには心当たりがないのです。あなたに対するぼくの振舞いは、礼儀をわきまえた男であれば、皆が皆、女性に対してそうするだろう、というようなものでした。ですから、ぼくの態度はそのような感謝のお気持ちにも、お礼のお言葉にも、値するようなものではないのです」

「プレイフエアさん」とジェニーが言った。「もうこれ以上、知らないふりをしてくださらなくても結構です。クロクストンが何もかも教えてくれましたから！」

「なんと!」と船長。「クロクストンが何もかも教えてくれた、とおっしゃるのですね。となると、ますますよく分からなくなってきたな。どうしてあなたが船室を出て、ぼくのところにお出でになり、そんな話を……」

などと口にしつつも、若き船長は身の置き場に困るような、相当に居心地の悪い思いをしていた。あのアメリカ人の提案を、自分がつっけんどんな態度であしらったことを思い出していたのだ。だが、じつに幸いなことに、ジェニーはそれ以上彼に説明の時間を与えることなく、相手の話を遮ってこう言った。

「ジェイムズさん、あなたの船に乗せていただいたとき、私にはチャールストンへ行く以外の計画はありませんでした。そして、チャールストンまで行けば、奴隷制を支持する人々がいかに残酷であろうとも、哀れな娘が父親と牢獄を共にしたいと言え、それを拒むことまではしないだろう、と。それだけだったのです。ですから、私ができもしない帰還を夢見ることもしてなかったはずですが、あなたがどこまでも寛大でいらっしゃり、囚われの父を救い出してやろうと言ってくださっている以上は、父を救うために、どんなことでもしてやろうと言ってくださっている以上は、私としては、心からの感謝の念を捧げるのみです。そして、どうかこの手をおとりいただければと思います」

ジェイムズには何と言ってよいのかも、どんな態度をとればよいのかも分からなかった。唇をかんでいた。踏ん切りがつかず、娘が差し出してくれているその手をとることができずにいた。後に退けなくなるよう、クロクストンが彼を「巻き込んだ」のだということはよく理解していた。しかしながら、ミスター・ハリバートの救出に協力し、厄介事を背負い込むつもりはさらさらなかった。だが、このかわいそうな娘が胸に抱いている希望を、どうすれば裏切ることなどできただろうか？ かくも深い親愛の情をこめて差し出してくれているこの手を、どうやって拒めばよいというのか？ 彼女の目からこぼれ落ちている感謝の涙を悲嘆の涙へと変えることが、どうしてできただろうか？

かくして青年は、自分が行動の自由を確保し続けられるように、また、将来についての約束をせずに済むように、何とかして曖昧な答えを返そうと知恵をふり絞った。

「ミス・ジュニー」と彼は言った。「どうか信じてください、ぼくはありとあらゆる手を尽くして……」

そして、両手でジュニーの小さな手をとった。が、その手が優しく握りしめてくるのを感じると、心がとろけ、頭が混乱するのに気づいた。自分

の考えを伝えるための適当な言葉が見つからなかった。もごもごと曖昧な言葉をいくつか口にするばかりだった。

「ミス……ミス・ジェニー……あなたのために……」

この様子を窺っていたクロクストンは、相好を崩しながら満足げに揉み手をしつつ、何度もこうつぶやいていた。

「うまくいくぞ！ うまくいくぞ！ よし、うまくいった！」

どうすればジェイムズ・ブレイフェアに、この厄介な状況から抜け出すことができたろうか？ それを示してやれる者など誰一人としていなかっただろう。だが、デルフィン号にとってではないにせよ、彼にとっては幸いなことに、見張り役の水夫の声が聞こえてきた。

「おい！ 当直の士官殿！」と水夫は叫んだ。

「何があった？」とミスター・マシューが返事をした。

「風上に帆が見えます！」

ジェイムズ・ブレイフェアはすぐさま娘にいとまを告げて、^{ミズンマスト}後檣のシュラウド⁴⁵⁾の中へと飛び込んでいった。

V イロクオイ号の砲弾とミス・ジェニーの議論

それまでのところ、デルフィン号の航海は大きな幸運に恵まれ、また速度に関しても素晴らしい条件のもとで遂行されていた。見張りが例の船を知らせるまでは、まだ1隻たりとも視界に現れていなかったのである。

そのときデルフィン号は、緯度32度15分、経度はグリニッジ子午線の西方57度43分の位置にあり、つまりは旅程の5分の3を消化したところだった。48時間前に出始めていた霧が、その頃にはもう大西洋の海原を覆い尽くしていた。霧は、航走を隠してくれるという意味ではたしかにデルフィン号にとって有利に働いていたが、デルフィン号が広範囲にわたっ

45) マストを左右から支えるロープの総称。

て海を監視するのを妨げてもいたので、遭遇を回避したかった他の船と、思いがけぬタイミングで、いわば船縁^{ふなべり}を接するようにして、航行しているということもあり得た。

そして、それこそがまさに先ほどから起こっていた事態なのだが、くだんの船は、その存在が知らされたときには、風上にせいぜい3海里⁴⁶⁾ほどしか離れてはいなかった。

横桁^{バー}まで到達したジェイムズ・プレイフェアは、全速力で航走している北軍の大型コルヴェット艦⁴⁷⁾を霧の晴れ間にはっきりと認めた。それは、デルフィン号の方へ、進路を遮るようなかたちで向かってきていた。

船長はコルヴェット艦を念入りに観察してから甲板に降り、副船長を呼び出した。

「ミスター・マシュー⁴⁸⁾」と彼は言った。「あの船についてはどうお考えですか？」

「思うに、あれは連邦海軍の船で、こちらが何をするつもりなのかを怪しんでいるんでしょうね」

「たしかに、あの船の国籍については疑いの余地がありません」とジェイムズ・プレイフェア。「見てください」

ちょうど、北部合衆国の星条旗がコルヴェット艦の斜桁^{ガフ}⁴⁹⁾へと揚がっていくところだった。艦は、礼砲を撃つことでその国籍旗を保証していた⁵⁰⁾。

46) [原註——5556メートル、すなわち5キロメートル半を少し超える程度。]

47) 3本マストの小型帆走軍艦。2本マストのブリッグ艦よりは大型だが、後出のフリゲート艦よりは小型のものを指すことが多い。

48) 原文では「Monsieur Mathew」。本作品において、この人物は、地の文では一貫して「ミスター・マシュー (Mr. Mathew)」, ジェイムズの台詞の中でのみ、フランス語で「ムッシュ・マシュー (Monsieur Mathew)」と呼ばれているが、拙訳では——ジェイムズがフランス語を用いるのは不自然なので——「ミスター・マシュー」に統一した。

49) マストから斜めに突き出た円材のこと。帆を吊り下げたり、旗を掲げたりするのに用いる。

50) 当時、船が国旗を掲げながら礼砲を撃つのは、「名誉にかけて、これが本船の国籍旗であることを保証します」という意味を持った。

「われわれの旗も見せるように、とのお誘いです」とミスター・マシューが言った。「では、見せてやりましょう。見せたって、恥ずかしいものじゃないんですから」

「そんなことをして何になるでしょう？」とジェイムズ・プレイフェアが答えた。「旗を掲げても、それがぼくたちを覆い隠してくれるわけではないですし、どの道、あの連中はこちらに乗り込んできたがるに決まっています。駄目です。前進しましょう」

「それに、船足も速めた方がよさそうです」とミスター・マシューが続けた。「と申しますのも、もしこの両の目が間違えていなければ、あのコルヴェット艦、リヴァプール近海のどこかで見たことがあるんです。建造中の船を偵察しに来ていました。もし奴の船尾^{タフレール}⁵¹⁾の船名版に「イロクォイ号」⁵²⁾と書かれていなかったら、私は面目丸潰れ、ということになっても構いません」

「あの船、スピードは出ますか？」

「連邦海軍では最速のものの一つです」

「艦載砲は？」

「8 門」

「なんだ、それだけか！」

「おや！ 肩をすくめないでくださいよ、船長」とミスター・マシューが真剣な口調で応じた。「8 門のうちの 2 門は旋回式で、60 ポンドの方が船尾楼に、100 ポンドの方が甲板に置かれています。両方とも施条砲^{ライフル}⁵³⁾です」

51) [原註——アメリカの大型船の船尾を指す呼称。]

52) 北米東部の森林地帯に居住していた先住民族の呼称「イロクォイ (Iroquois)」からとられた船名か。

53) 砲弾に回転を与えるために、砲身の内側に施条^{ライフリング}と呼ばれる螺旋状の浅い溝が刻みこまれた大砲のこと。砲腔に施条をもたない旧式の滑腔砲よりも長距離・高精度の砲撃を行うことができた。

「なんと！」とジェイムズ・プレイフェア。「パロット砲⁵⁴⁾ですね。射程3マイルですよ、そいつは」

「そうですね。あるいは、もっと飛ばすかもしれません」

「いいですか、ミスター・マシュー。大砲が100ポンドであっても4ポンドであっても、射程距離が3マイルであっても500ヤードであっても、その砲弾を避けられる速さでこちらが走っていれば、同じことです。ですからあのイロクォイ号に、走るために造られた船がどんなふうに走るのかを見せてやることにしましょう。火力を上げるように言ってください」

船長の命令を副船長が機関士^{エンジニア}⁵⁵⁾に伝え、すぐに蒸気船の煙突の上に黒い煙が渦巻いた。

この兆候は、どうやらコルヴェット艦のお気に召すものではなかったようだ。というのも、停船せよ、という合図をデルフィン号に送ってきたからである。だが、ジェイムズ・プレイフェアはこの警告を完全に無視し、船の針路を変更しなかった。

「さて」と彼は言った。「イロクォイ号がどうするか、見てみることにしましょう。奴にとっては100ポンド砲の試し撃ちをして、射程距離を知るためのいい機会です。全速前進！」

「了解！」とミスター・マシュー。「もうじき手荒なやり方で挨拶してくるんでしょうね」

54) アメリカの砲兵将校ロバート・パーカー・パロット (Robert Parker Parrott, 1804-77) が退役後にウェストポイント大砲鑄造工場の監督官となり、そこで1860年に発明した施条砲。射撃精度が高いうえ、安価に製造できたため、1861年に開始された南北戦争においてもさっそく南北両軍によって多用された。

55) [原註——英国海軍では機関士がこう呼ばれている。] 蒸気船の「機関士」は、フランス語では「mécanicien」、英語では「engineer」と呼ばれるが、英語の「engineer」に相当するフランス語の「ingénieur」は「機関士」ではなくて「技師」を指すため、読者の混乱を防ぐために、ヴェルヌはここに註を付けている。なお、本作品では以後も一貫して「機関士」には「mécanicien」ではなくて「ingénieur」という語が当てられている。

船尾楼甲板に戻ると、船長はミス・ハリバートが手すりのそばにのんびりと腰かけているのを目にした。

「ミス・ジェニー」と彼は声をかけた。「十中八九、ぼくらはこれから風上に見えるあのコルヴェット艦の追跡を受けることになります。じきに砲弾で話しかけてきますから、腕をお貸ししましょう。船室までお連れします」

「ご親切にありがとうございます、プレイフェアさん」青年を見つめながら娘が答えた。「でも、私、砲撃なんか怖くありません」

「しかし、お嬢さん、距離はありますが、いくらか危険があるかもしれませんよ」

「まあ！ 私、臆病な娘に育てられたりはしていませんわ。アメリカにいと、何にでも慣れてしまいます。ですから本当に、イロクオイ号の砲弾が怖くてこの身を屈めることなんかないんです」

「勇気がありますね、ミス・ジェニー」

「そういうことにしておきましょう、プレイフェアさん。そして、そばにいてもいい、とおっしゃってください」

「何であれ、あなたの頼みごとをお断りすることなんてありませんよ、ミス・ハリバート」娘の穏やかで落ち着いた様子をじつくりと眺めながら、船長が答えた。

この言葉が言い終えられたかどうかというところで、北軍のコルヴェット艦の甲板の手すりの外に白い蒸気が噴きあがるのが見えた。砲声がデルフィン号のところまで届く前に、尖頭円筒形⁵⁶⁾の放射物が一つ、恐ろしい速度で回転しながら、いわば空気中にネジを打ち込むようなかたちで、蒸気船の方へと向かってきた。比較的ゆっくりと飛んでいるせいで、その様子は容易に目で追うことができた。というのも、砲弾は、滑腔砲よりも

56) 円筒の上に、その円筒と軸を共有し、半径の等しい円錐を載せた形。

ライフル
施条砲の口から飛び出してくるときの方が、スピードが遅くなるものだからだ。

デルフィン号から20ブラス〔約32m〕のところまで到達すると、目に見えて弾道が下がっていた砲弾は海面の波頭をかすめ、次々に噴きあがる水しぶきによって自らの通過をしるしづけた。ついで、液体の表面に触れると弾みをつけ直し、またしても相当な高さにまで飛びあがって、フォアヤード⁵⁷⁾の右舷側の転桁索を切断しながらデルフィン号の頭上を越え、その向こう側、30ブラス〔約48m〕の地点に落下して波間に沈んだ。

「危なかった！」とジェイムズ・プレイフェア。「距離だ！ 距離を稼ごう！ 第2弾もすぐに来るぞ」

「なあに！」とミスター・マシュー。「ああいった大砲に弾を装填しなおすには、そこそこ時間がかかりますよ」

「ふむ、これはなんとも見ものじゃないか」と、我関せず、という風情で腕組みをしながらこの光景を眺めていたクロクストンがつぶやいた。「それにしても、あんな砲弾を送ってよこすのが、俺たちの同胞だっていうんだからな！」

「ああ！ おまえさんか！」とジェイムズ・プレイフェアが声をあげ、つま先から頭のとっぺんまでアメリカ人をじろじろと眺めた。

「いかにも俺ですよ、船長さん」と動じることもなくアメリカ人が答えた。「あのお人よしの北軍の砲撃がどんなものか、見物に来たんです。なかなか悪くない。まったくのところ、悪くないですね！」

船長はクロクストンに対し、かなり辛辣な言葉を返そうとしていたのだが、そのとき第二の砲弾が飛んできて、右舷側の船尾の真横で海を叩いた。

「よし！」とジェイムズ・プレイフェアが叫んだ。「あのイロクオイ号にもう2鏈〔約400m〕もの差をつけているぞ。ほら、どうだい、クロクス

57) フォアマスト
前 檣 のいちばん下の帆桁のこと。

トン先生、まるで浮標^{フイ}みたいのにのろのろしているじゃないか、おまえさんのお仲間は？」

「そうでない、とは申しませんよ」とアメリカ人が答えた。「でも、人生で初めて、そいつを喜ばしく思わざるを得ませんね」

3発目の砲弾は、最初の2発に比べると、はるか後方までしか届かなかった。そして、10分も経たないうちに、デルフィン号はコルヴェット艦の大砲の射程圏外に出ていた。

「あの砲弾、世界中のどんな曳航測程儀^{バテント・ログ}にも匹敵しますね、ミスター・マシュー」とジェイムズ・プレイフェアが言った。「おかげで、こちらのスピードについて、詳しく知ることができました。ここからは、火力を落とすように言ってください。燃料を無駄遣いすることもありますから」

「優秀な船を指揮していらっしゃるのね」と、そのときミス・ハリバートが若き船長に声をかけた。

「そのとおりです、ミス・ジェニー。わがデルフィン号は17ノットで走っています⁵⁸⁾。北軍のコルヴェット艦は日が落ちる前に視界から消え去るでしょう」

ジェイムズ・プレイフェアは自分の船の航海能力を大げさに言っているわけではなかった。実際、太陽がまだ沈まぬうちに、アメリカ船のマストのてっぺんは水平線の向こうに消えていた。

このちょっとした出来事のおかげで、船長はまったく新しい観点からミス・ハリバートの性格を評価することができた。それに、わだかまりも解

58) 新見志郎『軍艦と装甲』（光人社 NF 文庫、2016年）によれば、南北戦争と同時期（1860年代前半）に建造された英国の装甲艦（ディフェンス号、ロイヤル・オーク号、フェイバリット号、リサーチ号、エンタープライズ号、ヴィクセン号など）の速力は10～13ノットだったようなので、デルフィン号の「17ノット」は当時としては相当に速かったことが分かる。1860年12月に進水した大型装甲艦ウォーリア号であっても、蒸気機関と帆を併用した際の航走時に17ノットを記録したことはあるが、通常時の速力は約14ノットだったという。

けていたのだ。以後は、航海の残りの期間中、デルフィン号の船長と乗客の女性とのあいだで、頻繁かつ長時間にわたり、言葉が交わされることとなった。船長は、彼女の内に、落ち着きがあり、強い心を持ち、思慮深く、頭がよく、アメリカ流にごく率直に話をし、何事についても確たる意見を持ち、自信をもってそれを開陳する、そんな若い娘の姿を認めていたのだが、まさしくこの確信に満ちた態度こそが、ジェイムズ・プレイフェアの心を、彼自身は気づかぬうちに、深く感動させていたのである。彼女は自分の国を愛していた。^{ユニオン}連邦という偉大な理念に夢中になっており、合衆国のこの戦争については、誰であれ、他の女性ならばあり得なかっただろう、というくらいに熱狂しながら自分の考えを述べるのであった。そのため、一度ならず、ジェイムズ・プレイフェアが彼女に対してひどく返答に窮する、ということが起こった。さらには幾度となく「商人」^{ネゴシアン}の立場からの意見が議論の俎上に載せられたのだが、ジェニーはそれについてもたいへんな剣幕で論駁し、絶対に妥協しようとはしなかった。初めのうち、ジェイムズは大いに議論をした。北部連邦派に対して南部連合派の肩を持つとし、道理は脱退論者の側にある、ということを証明しようとし、自らの意志で結びついた人々は別れることになっても構わないのだ、ということを示そうとした。ところが、その点について、娘は譲ろうとしなかった。それどころか、北部のアメリカ人が南部のアメリカ人と闘っているこの戦争では、奴隷制の問題が何よりも重要なのだということを、また、政治よりも人倫や人間性の方がはるかに大切なのだということを彼女は論証したため、ジェイムズは反論することができずに言い負かされてしまったのだ。もっとも、こういった議論のあいだ、彼はとりわけ聞き手の側に回っていた。ミス・ハリバートの声音に耳を傾けながら感じていた魅力よりも、その議論の中身の方に彼が強い感銘を受けていたのかどうか、その点をしかと言いつけるのはほとんど不可能である。だが最終的に、彼はとりわけ以下の点については認めざるを得なかった。すなわち、合衆国でのこの戦争

においては、奴隷制の問題こそが本質的なものなのだ、ということ。また、決定的なかたちでこの問題にけりをつけ、野蛮な時代の暴虐の名残に終止符を打たねばならないのだ、ということ。

それに、すでに述べたとおり、船長は自分の政治的意見というものに、それほど強いこだわりがあるわけではなかったのである。仮にもっと切実な考えを抱いていたとしても、同じように心惹かれるかたちで、また似たような条件下で提示される議論があれば、そちらに乗り換えるのにやぶさかではなかっただろう。つまり、彼はこういった話題に関しては、自分の思想であっても、たいして重要なものとは思えていなかったのだ。しかし、事はそれだけでは済まなかった。この「^{ネゴシアン}商人」は、しまいには、このうえなく大切な利益の問題に関しても、直接的な非難を受けることになったのである。それは、デルフィン号の主な任務である密貿易について、この船が南部連合へと輸送している弾薬についてであった。

「そうですよ、ジェイムズさん」ある日、ミス・ハリバートが彼に言った。「恩義には感じていますけれど、だからといって、ざっくばらんにお話ししては駄目、というわけではないでしょう。むしろ、逆です。あなたは立派な船乗りであり、目端の利く商売人であり、プレイフェア商会はその信望の高さゆえに、お名前が引き合いに出されるような会社です。でも、いまこのときばかりは道義に背いていて、貴社にふさわしいお仕事をなさっているとは言えません」

「何ですって！」とジェイムズが声をあげた。「プレイフェア商会はこんな商取引に手を染めてはいけない、とおっしゃるのですか！」

「そのとおりです！ おかげで、自分の国の合法的な政府に対して大々的な反乱を起こしている困った人たちに、軍需品を届けることになってしまふんですよ。これでは、よからぬ大義のために武器を貸し出すようなものです」

「なるほど、ミス・ジェニー」と船長が答えた。「南部連合の正当性につ

いて、あなたと議論するつもりはありません。ただの一言でお返事申し上げることにしましょう。ぼくは商人であり、そうであるからには、わが社の利益のことにしか気にかけてはいません。利潤を求めて、儲けがありそうな場所であれば、どこへでも行くんです」

「それこそ非難されるべきことなんですよ、ジェイムズさん」と娘が言い返した。「利潤なんて、言い訳にはなりません。ですから、中国の人々に阿片を売りつけて、彼らの理性を奪っているときと同じくらい、あなた方はいまでも罪深いことをしているんです。なにしろ南部の人々に、犯罪的な戦争を続けるための資材を供給しているんですから！」

「なんと！ 今回ばかりは言い過ぎですよ、ミス・ジェニー、到底認めるわけには……」

「いいえ、私の言っていることは間違っていないです。もしあなたがご自身を省みて、己の果たしている役割をきちんと理解し、誰がどう見ても完全にあなたの責に帰すべき結果の数々について、思いを馳せてみたとすれば、他のいろいろな点についてと同様、この点についても私の方が正しい、と認めてくださるでしょう」

この言葉を聞いて、ジェイムズ・プレイフェアは二の句が継げなかった。それから本気で腹を立て、娘にいとまを告げたのだが、それというのも、自分にはうまく言い返すことができないと感じていたからだった。その後、半時間、あるいは長く見積もったとしても1時間、子どものようにふてくされていたのだが、かくも愛らしい笑顔を浮かべながら周知きわまりない議論で彼を打ち負かす、あの不思議な娘のところにまた舞い戻っていくのだった。

要するに、彼の方ではいまいしく思っていたが、また、それを事実と認めたくはなかったが、ジェイムズ・プレイフェア船長は、いまとってはもう自分の思うとおりに振舞えていなかったのである。自分の船に乗っているにもかかわらず、もはや「神に次ぐ支配者」⁵⁹⁾ではなかった。

というわけで、クロクストンは大喜びしていたわけだが、ミスター・ハリバートの件は好ましい方向に進んでいるように思われた。ミス・ジェニーの父親を救い出すためであれば、どんなことでもしてやろう、と船長が覚悟を決めているように見えたからだ——そのせいで、デルフィン号を、その積み荷を、乗組員を、危険にさらさざるを得なくなったとしても。また、尊敬すべきヴィンセント伯父さんの呪詛の言葉を聞かされる羽目に陥ったとしても。

VI サリヴァン島の水路

コルヴェット艦イロクオイ号との遭遇の2日後、バミューダ諸島の真横を航行していたデルフィン号は猛烈な突風に見舞われることになった。この海域にはしばしば途方もなく激しい暴風が襲来するのである。海難事故が多いことで有名な場所であり、シェイクスピアが、エアリエルとキャリバンのあいだで海の支配権が争われる劇作品『テンペスト』の中の、このうえなく感動的ないくつかの場面の舞台を据えたのもここだった⁶⁰⁾。

風は恐ろしい勢いで吹き荒れていた。ジェイムズ・プレイフェアは、一瞬、バミューダ諸島のうちの一つであり、英国軍の駐屯所が置かれているメインランド⁶¹⁾に寄港しようかとも考えた。が、それでは残念な、またと

59) 原語は「*maître après Dieu*」。船における船長の絶対的な地位・権限を表す定型表現。

60) 『テンペスト』第1幕第2場には、たしかに妖精エアリエルが「バミューダ諸島」に言及するシーンがあるが、この戯曲の舞台が——ヴェルヌの言うように——バミューダ諸島周辺の海域であるかどうかについては判然としない。『テンペスト』の登場人物たちは、チュニジアからイタリアへと向かう航海の途上、難船するので、彼らが漂着する架空の無人島は、大西洋よりはむしろ地中海のどこかに位置すると考えるのが妥当であろう。なお、エアリエルと怪物キャリバンが「海の支配権を争う (*se disputer l'empire des flots*)」という表現も物語の要約としては正確さを欠いており、実際にはこの両者は直接的にはほとんど関係をもたない。

61) 原文には（自筆原稿、雑誌掲載版、単行本収録版のいずれにおいても）「Mainland」とあるのだが、おそらく「Main Island（メイン・アイランド）」の誤記。

りわけ悔やまれる事態になってしまっていただろう。幸いなことに、嵐のあいだ、デルフィン号はじつに見事に航行した。そして、暴風を丸一日回避したあとで、アメリカの海岸へと向かう航路を取り戻すことに成功した。

だが、自分の船について満足げな様子を見せる一方で、ジェイムズ・プレイフェアは若い娘の勇敢さと冷静さについても同じくらい喜ばしく思っていたのだった。暴風が最も強烈に吹き荒れていた時間帯を、ミス・ハリバートは甲板の上、彼のそばで過ごした。そのため、よくよく自分の胸に尋ねてみた結果、ジェイムズは、深く激しく抗いがたい愛情が彼の全存在をとらえていることを理解したのだった。

「そうだ」と彼は口にした。「あの勇敢な娘こそがぼくの船の支配者なんだ！ あの娘は海が難破船を転がすようにぼくを転がしている。もう沈没してしまいそうだ！ ヴィンセント伯父さんは何と言うだろうか？ ああ！ 人の性の^{さが}哀しさよ！ まちがない、もしジェニーがこの呪わしい密貿易の積み荷をすべて海に投げ捨ててくれと頼んできたら、彼女への愛ゆえに、ぼくは躊躇なくそれを実行に移してしまうだろう」

プレイフェア商会にとっては幸いなことに、ミス・ハリバートがこの犠牲を要求してくることはなかった。が、そうは言っても、哀れな船長は見事に虜になっていたし、その心中を手にとるように読んでいたクロクストンは、手の皮が擦りむけてしまうのではないかというくらいに力強く満足の揉み手をしているのだった。

「捕まえた！ がっちり捕まえたぞ！」と彼は心の中で繰り返していた。「こうなったらもう一週間も経たないうちに、ご主人様は船に乗り、デルフィン号の中でいちばん上等な船室に、のんびり腰を落ち着けていることだろう」

一方、ミス・ジェニーについて言えば、彼女が自分の抱かせている恋心に気が付いていたのかどうか、その感情に自らも身を委ねていたのかどうか、その点を言い当てられる者など誰一人としておらず、中でもジェイム

ズ・ブレイフェアにとっては皆目見当もつかなかった。アメリカで受けた教育の影響を蒙りながらも、この娘は完璧に慎み深い態度を保っており、その秘密は心の奥底に埋められたままだったのだ。

だが、若き船長の心の中で恋がこのように成長を遂げているあいだに、デルフィン号もそれに劣らぬ速さでチャールストンへと急行していた。

1月13日には、西方10マイルの地点に陸地が見えるぞ、と見張りが知らせてきた。その海岸は標高が低く、遠目には波打つ海面とほとんど見分けがつかなかった。水平線を注意深く観察していたクロクストンは、午前9時頃、雲の切れ間の中の一点を指差して、こう叫んだ。

「チャールストンの灯台だ！」

もしデルフィン号が夜のあいだに到着していたのであれば、モリス島に設置されており、海拔140ピエ〔約45m〕もの高さをもつこの灯台は、何時間も前から視認されていたことだろう——というのも、その回転灯の輝きは、14マイルの距離からでも見えるものなのだから。

かくしてデルフィン号の位置が測定されると、ジェイムズ・ブレイフェアにはあと一つしかすべきことはなかった。すなわち、どの水路からチャールストンの湾に入り込んでいくかを定めることである。

「何の障害にも出くわさずに済めば」と彼は言った。「3時間もしないうちに、ぼくらは港のドックに落ち着いているだろう」

チャールストンの街は、チャールストン・ハーバーという名の幅2マイル、奥行き7マイルの河口域エスチュアリーの奥にあり、その河口域に入っていくのはかなり難しい。その入口は、南側はモリス島に、北側はサリヴァン島⁶²⁾に

62) 「原註——アメリカの高名な小説家エドガー・ポーが、自作に登場する奇怪きわまりないいくつかの場面の舞台としたのがこの島である。」サリヴァン島は、サウスカロライナ州、チャールストン湾の入口にあるエドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 1809-49) ゆかりの島。1827年11月から1828年12月にかけて、ポーはアメリカ合衆国陸軍第一砲兵連隊の一員としてサリヴァン島西端のモールトリー要塞に駐屯しており、後年、「黄金虫 (The Gold-Bug)」(1843) や「軽気球夢譚 (The Balloon-Hoax)」(1844) といった

挟まれている。デルフィン号が海上封鎖を突破しに来た時期にはモリス島はすでに北軍の手に落ちており、錨地を一望のもとに収めて砲撃することのできる砲列をギルモア将軍⁶³⁾が建設させている最中だった。それとは対照的に、サリヴァン島の方は、島の端に位置するモールトリー要塞の中でおも持ちこたえている南軍の支配下にあった。したがって、デルフィン号にとってはモリス島の砲列からの攻撃を避けるために、北の海岸線ぎりぎりをかすめて航行する方がはるかによかった。

河口域の中に入り込むための水路は5本。すなわち、サリヴァン島の水路、北水路、オーヴァーオール水路、主水路、そしてローフォード水路である。だが、このうちの最後のものは、この水域のことをよく知る優秀な水先案内人を乗せ、なおかつ喫水7ピエ〔約2.3m〕以下の船で行くのでなければ外国人に挑めるような代物ではない。かたや、北水路とオーヴァーオール水路は、北軍の砲列からの縦射を受けてしまうような位置にあった。そのため、この2本も候補とすることはできない。もしも任意のものが選べるのであれば、ジェイムズ・プレイフェアは、最良のものであり、海底の隆起をたどりやすくもある主水路へと自らの蒸気船を差し向けていたことだろう。だが、そのあたりは状況に委ねることとし、何が起るかに応じて決断を下す必要があった。そもそもデルフィン号の船長は、この湾についてはあらゆる秘所を、暗礁を、干潮時の水深を、海流を、知り尽くしていたのである。そのため、これらの狭水路のうちの1本に進入しさえすれば、これ以上はないというほど確実に船を操ることができるはずだった。だから、肝心なのは、とにかくそこへ入り込んでいく、という

63) 短篇小说の中にサリヴァン島を登場させている。
クインシー・A・ギルモア(Quincy Adams Gillmore, 1825-88)。オハイオ州出身の軍人。1863年7月に少将に任命され、同年9月までモリス島とその周辺での戦闘を指揮した。ただし、ギルモアがサムター要塞攻撃の指揮を執り始めるのは1863年7月なので、本章の物語の現在時が1863年1月だとすると、ヴェルヌの記述は不自然。

ことだったのだ。

ところで、ここでの操船は、海での豊富な経験と、デルフィン号の性能についての精確な理解を必要としていた。

というのも、ちょうど北軍のフリゲート艦⁶⁴⁾が2隻、チャールストンの水域を巡航していたからだ。その2隻について、ミスター・マシューがすぐにジェイムズ・プレイフェアに注意を促した。

「奴ら、われわれがこの海域に何をしに来たのかを訊こうとしているようですね」

「では、返答しないことにしましょう」と船長が答えた。「知りたがったところで、無駄骨を折ることになるわけです」

そんな言葉を交わしているあいだも、巡洋艦は全速力で向かってきていたのだが、デルフィン号はその大砲の射程圏内には入らないように留意しつつ、自らのルートを進み続けた。が、時間を稼ぐために、ジェイムズ・プレイフェアは南西の方角に針路をとり、敵船を騙そうとした。実際、敵はデルフィン号がモリス島の水路に入ろうとしているのだと考えたはずだ。かたや、そちらには、弾が1発でも命中すれば、この英国船を沈めることのできそうな大砲や砲兵部隊がひしめいていた。そのため、北軍は、デルフィン号が南西の方角へと航行していくに任せ、過度にしつこい追跡は行わず、様子を窺っているだけでよしとしたのだった。

そんなわけで、1時間のあいだ、船舶同士の位置関係については変化が起こらなかった。そもそもジェイムズ・プレイフェアは、デルフィン号の進路について巡洋艦を欺くために、滑り弁⁶⁵⁾の機能を弱めており、ゆった

-
- 64) 軍艦の艦種の一つだが、具体的にどのような艦を指すのかは、時代によって異なる。南北戦争の頃は、コルヴェット艦よりも大型ではあるが、戦列艦よりは小型、かつ高速移動が可能な遊撃艦を指した。敵艦隊との砲撃戦よりはむしろ哨戒、通報、味方の船団の護衛、敵の商船の拿捕・破壊などで活躍した。
- 65) 蒸気機関のシリンダーの中にあり、蒸気の流入口と排気口とを滑って往復する弁のこと。滑り弁のこの往復運動によって流路の開閉が行われ、シリンダーへの蒸気の給排がコントロールされる。

りとしたスピードでしか船を進めていなかったのだ。とはいえ、分厚い煙の渦が煙突から漏れ出してくるのを目にすれば、敵船は、デルフィン号が蒸気圧を最大まで引き上げようとしているのだと、つまり速度を最大まで引き上げようとしているのだと考えるはずだった。

「奴ら、もうじきびっくりすることになるだろうね」とジェイムズ・ブレイフェアが言った。「自分たちの手から、ほくらがするりと逃げていくのを目の当たりにすることになるんだから！」

この言葉のとおり船長は、船がモリス島に十分に近づき、射程距離不明の大砲の並ぶその前まで来たと見るや、不意に舵の向きを変え、船をその場で独楽のように回転させて北へと戻ること、風上2マイルの地点に巡洋艦を置き去りにしたのだった⁶⁶⁾。この操船の様子を目にするや、敵は蒸気船のたくらみを理解し、猛然と追跡を開始した。が、時すでに遅し。デルフィン号はスクリューを目一杯回転させて速度を倍化させることで敵船を素早く引き離し、海岸に近づいていた。悔しまぎれに何発かの砲弾が発射されたが、どれも双方の中間地点にすら届かず、北軍は弾を無駄遣いしただけだった。午前11時にサリヴァン島のすぐそばを航行していた蒸気船は、喫水が浅いおかげで、狭い水路の中へも全速力を保ったまま入っていくことができた。そして、そこまで来れば、人心地がつけた。というのも、北軍のいかなる巡洋艦であれ、干潮時の水深の平均が11ピエ〔約3.5m〕にも満たないこの水路までは、わざわざ追いかけて来るはずはなかったからだ。

「なんと」とクロクストンが声をあげた。「こんなに簡単に撒けるものなのか？」

66) 南北戦争当時、速力があるうえに小回りがきくことは、船舶にとって大きなアドバンテージだった。大型の艦船は、速力はあるにせよ、しばしば運動性・操縦性に難があり、例えば装甲艦ウォーリア号は、旋回径が900メートルを超え、360度の回頭に8分半を要したという(新見志郎『軍艦と装甲』、前掲書、p. 41を参照)。

「おやおや、クロクストン先生」とジェイムズ・プレイフェアが答えた。「難しいのは、入ることじゃなくて、出ることの方なんだよ」

「へっ!」とアメリカ人が応じた。「そんなのは、たいして心配しちやいませんや。デルフィン号みたいな船があつて、ジェイムズ・プレイフェアみたいな船長がいれば、好きなときに入って、好きなときに出ていくことができるでしょうからね」

そのあいだも、ジェイムズ・プレイフェアは望遠鏡を手に、進むべきルートを注意深く見定めようとしていた。手元には何枚もの優れた海岸図⁶⁷⁾があり、おかげで少しも窮地に陥ることなく、かすかなためらいを覚えることもなく、前へ進んでいくことができた。

サリヴァン島に沿って伸びる狭い水路に船がひとたび入ると、ジェイムズはモールトリー要塞の中央部を西微北2分の1西⁶⁸⁾の方角に見定めながら操船し、シューツ・フォリーの孤島⁶⁹⁾にそびえ立ち、その暗い色で見分けのつくピンクニー城⁷⁰⁾が北北西に見えてくるまで、そのまま舵を取った。かたや、左手に立つジョンソン要塞の建物がサムター要塞の北方2度の角度で臨めるよう、針路を保った。

そのとき、船はモリス島の砲列から発射された砲弾数発に出迎えられたが、命中はしなかった。そのため、わずかに逸れることもなくルートを進み続け、サリヴァン島の端に位置するモールトリーヴィルの前を通過して水路を脱出し、湾の中へ出た。

67) 航海用の海図の一種（縮尺30万分の1～5万分の1）。沿岸の地形が詳細に表現されているため、海岸近くを航行したり、港湾に出入りしたりする際に用いられる。

68) 艦船などが航海の際に使用していた「128方位」——方位の表現形式の一つであり、円周を128等分することで得られる——に則った方位の名称の一つ。北を基準（零度＝360度）とする360度式の方位角で言えば、およそ275度37分、すなわち西（270度）と西微北（281度15分）の中間を指す。

69) チャールストン湾に浮かぶ小島。

70) シューツ・フォリー島に1810年に築かれた小さな城砦。南北戦争中は、砲兵の陣地、捕虜の収容所として利用された。

じきに船はサムター要塞を左手にやり過ごし、北軍の砲列からは、その要塞に匿ってもらうかたちとなった。

この要塞は、合衆国での戦争において有名になったものだが、チャールストンからは3と3分の1マイル⁷¹⁾、湾の両岸からは約1マイルの距離にある。五角形の一部が切り取られたような形をしており、マサチューセッツ産の花崗岩でできた人工島に建てられているのだが、その建造には10年を要し、工費も90万ドル⁷²⁾を超えていた。

1861年4月13日⁷³⁾にアンダーソン⁷⁴⁾麾下の北軍が追い出されたのもまさしくこの要塞からであり、分離派⁷⁵⁾による最初の砲撃が行われたのもまさしくこの要塞に対してだった。北軍の大砲がこの要塞に浴びせかけた鉄や鉛の総量を算定することなどではしないだろう。にもかかわらず、この要塞は3年近く持ちこたえたのである。そして、デルフィン号の通過後、何か月も経ってから、ギルモア将軍がモリス島に建造させたパロット施条砲からの300ポンドの砲弾を受けて、この要塞は陥落したのだった⁷⁶⁾。

しかしながら、当時⁷⁷⁾はまだ余力充分であり、この巨大な石造りの五角形の上には南部連合の旗がひるがえっていた。

ひとたび要塞を通過すると、アシュリー川、クーパー川という2本の川のあいだに横たわるチャールストンの街が見えてきた。この街は、錨地へと張り出した岬の突端部分を形成しているのである。

ジェイムズ・プレイフェアは、モリス島の盛り土の上に見えるチャールストンの灯台を南南西の方角に残したまま、港湾水路の位置を示すブイの

71) [原註——5キロメートル。]

72) [原註——約500万フラン。]

73) 正しくは、1861年4月14日。

74) ロバート・アンダーソン (Robert Anderson, 1805-71)。ケンタッキー州出身の軍人。南北戦争の開始時には少佐としてサムター要塞の指揮官を務めていた。

75) 合衆国からの南部諸州の分離・独立を支持する人々を指す。ここでは南軍のこと。

76) サムター要塞の陥落は、実際には1865年2月。

77) 本作品の物語の現在時である1863年1月の時点。

列のあいだを航走した。そのときにはもう斜桁^{ガフ}に英国旗を掲げており、水路の中では驚異的な速度で船体を回転させていた。

検査錨地のブイ⁷⁸⁾を右舷側に残したまま通過すると、彼は湾の真ん中を気兼ねなく進んでいった。ミス・ハリバートは船尾楼甲板に立ち、父親が囚われの身となっているこの街をじっと見つめていたのだが、その目からはいまにも涙がこぼれ落ちそうだった。

最終的に、船長の命を受けて蒸気船の歩みが緩められた。デルフィン号は岬の突端のあたりで南側と東側の砲列のすぐそばを航過し、その後、ほどなくしてノース・コマーシャル・ワーフ⁷⁹⁾に停泊した。

VII 南軍の将軍

チャールストンの波止場に着いたデルフィン号は、大群衆からの歓呼の聲に迎えられていた。海路が嚴重な封鎖を受けているこの街の住民にとって、ヨーロッパからの船の来訪はごく珍しいことだったのである。斜桁^{ガフ}に誇らしげに英国旗を掲げているこの大型の蒸気船は、われわれの海域まで何をしに来たのだろう、と彼らは驚きながら考えていた。が、その旅の目的が、また、サリヴァンの水路を強行突破してきた理由が彼らの知るところとなり、その船腹には戦争のための密輸品がたんまり格納されているのだ、という噂が広まるや、拍手喝采や歓喜の叫び声はますます烈しいものになった。

ジェイムズ・プレイフェアは一刻も無駄にすることなく、この街の軍事司令官であるボーリガード将軍に引き合わせてもらった。将軍はデルフィン号の若き船長をいそいそと出迎えたのだが、それは当時、喉から手が出るほど欲しかった衣類や弾薬を兵士らに与えるのにちょうどいいタイミン

78) 検査錨地（船舶が検査を受ける際に投錨・停泊すべき場所として指定されている海上の特定区域）を示すブイのこと。

79) チャールストンの街の東側に存在していた埠頭の一つ。

グで彼が到着してくれたからだった。そのため、船の荷下ろしはただちに行う、ということで話はまとまり、英国の水夫らを手伝おうと大勢の人々が集まってきた。

船を降りる前に、ジェイムズ・プレイフェアはミス・ハリバートから父のことをどうかくれぐれもよろしく、と切願されていた。若き船長は全身全霊をもってこの娘に尽くしていたのである。

「ミス・ジェニー」と彼は言ったものだ。「ぼくのことは頼りにしてください。さって結構です。お父様を救うために、できるかぎりのことをいたしましょう。ですが、願わくば、この件、困難なことが何も起こらなければいいのですが。ぼくは今日中にもボーリガード将軍に会ってきます。そして、釈放してくださいと唐突に頼んだりせず、ミスター・ハリバートがいまどんな状況に置かれているのか、逃亡しないという宣誓をしたうえで仮釈放中なのか、それとも収監されているのかを聞き出してくるつもりです」

「かわいそうなお父様！」とため息をつきながらジェニーが言った。「娘がこんなに近くにいることも知らないんだから。あの腕の中に飛び込んでいけたらいいのに！」

「あと少しの辛抱ですよ、ミス・ジェニー。もうすぐお父様を抱きしめることができるはずです。ぼくは全力を尽くして行動すると、とはいえ慎重に、熟慮のうえで行動すると、信じていてください」

そんな経緯があったからこそ、ジェイムズ・プレイフェアは律儀に約束を守り、まずは商人として自社の取引を成立させ、デルフィン号の積み荷を将軍に引き渡し、綿花の膨大な在庫^{ストック}を二束三文で買い取り、さらには現在の時局の方へと話題を転じたのだった。

「つまり」と彼はボーリガード将軍に言った。「奴隷制を支持する側の勝利を信じておられるわけですね？」

「われわれの最終的な勝利については、一瞬たりとも疑ったことはありません。それに、チャールストンに関していえば、リー⁸⁰⁾の軍隊がじき

に攻囲をやめさせてくれるはずですよ。だいたい、奴隷制廃止論者なんぞに
いったい何が期待できるというんでしょうか？ あり得ないことですが、
いま仮に、ヴァージニア州、両カロライナ州⁸¹⁾、ジョージア州、アラバ
マ州、ミシシッピ州の商業都市が、まかりまちがってすべて彼らの手に落
ちたとしましょう。でも、それでどうなるというんでしょうか？ 彼らは
決して占領することのできない国の主^{あるじ}にでもなるんでしょうか？ いや、
そんな馬鹿な。ですから、私に言わせれば、もし万が一勝利を取めたとし
ても、彼らは自分たちが勝利を取めたことそれ自体に困り果ててしまうこ
とになるんです」

「では、部下の兵士らに絶対的な信頼を置いておられるんですね」と船
長が尋ねた。「チャールストンが攻囲のせいで荒廃し、厭戦ムードになる
という心配はないんですか？」

「ありません！ 裏切りなど、恐くはないんです。それに、もしチャール
ストンの街でほんのわずかでも統一主義者の運動を嗅ぎつけたとした
ら、私は裏切者たちを容赦なく血祭りにあげるでしょうし、街そのものも、
火や炎でもって焼き尽くすことになるでしょう。私はジェファースン・デ
イヴィス⁸²⁾ からチャールストンを託されているわけですが、チャールス
トンは絶対確実な人間の手に任されているのだとお考えくださって構いま

80) ロバート・エドワード・リー (Robert Edward Lee, 1807-70)。ヴァージニア州
出身の軍人であり、南軍の将軍。この時点 (1863 年 1 月) での肩書は「南部
連合北ヴァージニア軍総司令官」だが、戦争末期の 1865 年 2 月 6 日に「南
部連合軍総司令官」に就任する。しかしながら、同年 4 月 9 日、ヴァージニ
ア州アポマトックス・コートハウスにて北軍の総司令官ユリシーズ・S・グ
ラント将軍 (Ulysses S. Grant, 1822-85) に降伏。

81) ノースカロライナ州とサウスカロライナ州のこと。

82) ジェファースン・フィニス・デイヴィス (Jefferson Finis Davis, 1808-89)。
ミシシッピ州出身の軍人・政治家。1861 年 2 月 18 日から 1865 年 5 月 5 日ま
で、アメリカ連合国の大統領。南軍の最高司令官であり、将軍たちの任免権
も握っていたが、気難しい性格が災いして、多くの部下と仲違いした。ボー
リガードとのあいだにも実際には深い確執があり、二人は南北戦争終結後も
互いに激しく非難し合った。

せん」

「ここには北軍派の捕虜もいるんですか？」とジェイムズ・プレイフェアが質問し、この会話における主たる関心事までたどり着いた。

「ええ」と将軍が答えた。「南北分裂の最初の砲声が轟いた場所が、ここチャールストンでした。この街に暮らす奴隷制廃止論者たちが抗戦を試みたのですが、敗北してからは捕虜になっています」

「大勢ですか？」

「100人ほどです」

「仮釈放中で、市内にいるんでしょうか？」

「以前はそうだったんですが、ある日、連中の企んでいる陰謀を見つけてしましましてね。奴らのリーダーが攻囲軍との連絡手段の確保に成功し、そのせいで、この街の状況が敵に筒抜けになっていたんです。ですから、この危険な滞在客たちは監獄に閉じ込めざるを得なくなったわけですが、そういった北部連邦派の何人もが、城塞の斜堤^{グラシ}⁸³⁾にのぼるためだけに監獄を出る、ということになるでしょうね。そして、そこでは南軍の銃弾が10発ばかり放たれて、奴らの連邦主義を打ちのめすことになるわけです」

「なんですって！ 銃殺刑になるんですか！」思わず身を震わせながら、若き船長が叫んだ。

「そうです！ まずはリーダーからです。じつに肝の据わった男で、攻囲を受けている最中の街に置いておくにはあまりにも危険です。奴の通信文をリッチモンド⁸⁴⁾の大統領官邸に送ってあるので、8日も経たないうちに、奴の運命は完全に定まることになるでしょう」

「いま話題にされているその男は、いったい何者なんですか？」このう

83) 城壁の外（堡塁の前面）に設けられた、外側へ行くにつれて緩やかに下っていく斜面のこと。

84) アメリカ連合国の首都。1865年に北軍の総攻撃を受けて陥落し、南北戦争は南軍の敗北となって終結する。

えなく無頓着な様子を装って、ジェイムズ・ブレイフェアが尋ねた。

「ボストンのジャーナリストで筋金入りの奴隷制廃止論者、リンカンに盲従している男ですよ」

「で、名前は？」

「ジョナサン・ハリバート」

「かわいそうに！」と動揺を抑えながらジェイムズが言った。「その男が何をしたにせよ、同情せざるを得ませんね。それで、銃殺刑になるだろう、とお考えなのですか？」

「そうなると確信しています」とボーリガードが答えた。「仕方がないじゃありませんか！ 戦争は戦争です。わが身を守るために、できるかぎりのことをしなければ」

「まあ結局のところ、ぼくには関係のないことですがね」と船長が応じた。「それに、その処刑が実行される頃にはもう遠くへ行っているでしょうし」

「何ですと！ もう出発をお考えになっているんですか！」

「ええ、ぼくらは何よりもまず商人です。綿花の積み込みが済んだら、すぐに出航する予定なんです。チャールストンには入ることができました。それは結構なことですが、また出ていかなければなりません。そちらの方が重要なんです。デルフィン号は優秀な船ですから、連邦海軍のどんな艦艇が相手でも、競走であれば勝負を挑むことができます。ですが、どんなに速いとはいえ、100ポンドの砲弾よりも速く走れるなんて思いあがっているわけではありませんし、船体や機関に1発でも食らったら、ぼくの商売上の目論みは物の見事に破綻することになってしまいます」

「お好きなようになさってください」とボーリガードが応じた。「こんな状況では、ご助言申し上げることもできません。あなたは自分の務めを果たしておられる。それでいいのです。あなたの立場だったら、私も同じように行動するでしょう。それに、チャールストンでの滞在は快適とはい

がたいですし、4日のうち3日も砲弾の雨が降り注ぐような錨地など、船にとっては安全な避難所ではありません。ですから、お好きなときにご出発ください。ただ、ちょっと情報をいただきたい。チャールストンの前を巡航している北軍の船の数や戦力は、どのようなものなのでしょうか？」

ジェイムズ・プレイフェアはできるだけ丁寧に將軍の要求に応えた。そして、このうえなく友好的な雰囲気の中でいとまを告げた。ついで、デルフィン号に戻ったのだが、いま知ったばかりのことについて、ひどく気をもみ、悲嘆に暮れていた。

「ミス・ジュニーに何と言おうか」と彼は考えていた。「ミスター・ハリバートの置かれている恐ろしい状況について、知らせなければならぬのだろうか！ その現状を脅かしている危険については、知らせずにいた方がいいのだろうか？ かわいそうに！」

司令官の家を出てから50歩も行かないうちに、彼はクロクストンに出くわした。この尊敬すべきアメリカ人は、出かけたときからずっと彼を見張っていたのである。

「どうでした、船長さん？」

ジェイムズ・プレイフェアはクロクストンをじっと見つめた。それで、クロクストンの方も、よい知らせはないのだな、ということをはっきりと悟った。

「ボーリガードには会えたんですか？」と訊くと、

「ああ」とジェイムズ・プレイフェアが答えた。

「で、ミスター・ハリバートのことを話題にしたんですか？」

「いや！ 向こうから話してきた」

「で、どうでした？」

「どうでしたって！……おまえさんには何もかも言ってしまっていていいんだろうね、クロクストン」

「ええ、何もかも」

「ならば言おう！　ボーリガード将軍が言うには、おまえさんのご主人様は、8日後に銃殺刑に処される可能性があるそうだ」

この知らせを聞いて、クロクストン以外の者であれば、激怒して飛びあがったり、不名誉なものともなりかねない悲歎の情の激発に身を委ねたりしていたかもしれない。ところが、どんな障害を前にしてもたじろぐことのないこのアメリカ人は、口元に微笑のようなものを浮かべ、わずかにこう言っただけだった。

「なあに！　どうだっていいことですよ！」

「何だって！　どうだっていい！」ジェイズ・プレイフェアは叫んだ。「ミスター・ハリバートは8日後に銃殺されてしまうって言っているんだぞ。それなのに、おまえさんの返事は「どうだっていい」か！」

「ええ、だって、6日後にデルフィン号に乗って、7日後に大西洋上に出ていればいいんですからね」

「なるほど！」と船長が言い、クロクストンの手を握った。「いいことを言うじゃないか、おまえさん。胆の据わった男だな。ならば、ヴィンセント伯父さんとデルフィン号の積み荷には悪いが、ミス・ジェニーのために、ほくも必要とあらばこの身を投げ出すことにしよう」

「誰であれ、身投げなんかさせるわけにゃいきませんや」とアメリカ人が応じた。「そんなことをしたって、魚が喜ぶだけです。肝心なのは、ミスター・ハリバートを救い出すことでさあ」

「でも、知ってるだろ、そいつが難しいんだ！」

「ふん！」とクロクストン。

「厳しい監視下に置かれている囚人と連絡をとらなくちゃいけないんだぞ」

「そりゃそうですね」

「それに、奇跡と言ってもいいような脱獄をうまく成功させる必要がある！」

「なあに！」とクロクストン。「囚人の側は、逃げ出してやろうっていう考えに憑りつかれてるもんですが、それに比べれば、看守が囚人を見張ってやろうって考える程度はたいしたことないです。ですから、囚人というのは、どうやったって脱走に成功することになります。勝機があるのは、断然、囚人の方なんです。そんなわけで、俺たちの策略も力になって、ミスター・ハリバートは脱獄に成功するでしょうよ」

「おまえさんの言うとおりでな、クロクストン」

「いつだって俺の言うとおりでさあ」

「だが、それはともかくとして、どんな方法でやるつもりだ？ 何がしかの計画が必要だし、もしものときのための用心もしておかなくちゃいけない」

「そいつは俺が考えておきましょう」

「しかし、父親が死刑宣告を受けていて、その執行命令が今日か明日にでも届きかねないと知ったら、ミス・ジェニーは……」

「教えなきゃいいでしょう、それだけです」

「そうだな、知らせないでおこう。彼女にとっても、ぼくたちにとっても、その方がいい」

「ミスター・ハリバートの監禁場所は？」とクロクストンが訊いた。

「城塞だ」とジェイムズ・プレイフェアが答えた。

「結構です。それじゃ、船に戻りましょう！」

「戻ろう、クロクストン！」

VIII 脱獄

ミス・ジェニーはデルフィン号の船尾楼甲板に座り、不安にじりじりしながら船長の帰りを待っていた。彼が戻ってきたときも一言も発することはできなかったが、そのまなざしは、唇にさえそこまではできなかっただろう、というほどの熱をこめてジェイムズ・プレイフェアに問いかけていた。

船長の方では、クロクストンの協力も得て、父親の投獄に関する諸事実しか娘には伝えなかった。いわく、戦争捕虜について、ポーリガードの胸中を慎重に探ってきました。捕虜たちに対して将軍が好感を抱いているようには見えなかったので、軽率な行動は控え、臨機応変に立ち回ることになろうと思ったんです。

「ミスター・ハリバートが街で自由に暮らしているわけではない以上、逃走にはさらなる困難があると予想されます。ですが、ぼくは自分の務めを果たしてみせます。お誓いしましょう、ミス・ジェニー。あなたのお父様を乗せることなくデルフィン号がチャールストンの錨地を離れることはない、と」

「ありがとうございます、ジェイムズさん」とジェニーが言った。「心から感謝します」

この言葉を聞いて、ジェイムズ・プレイフェアは胸の中で心臓が飛び跳ねるのを感じた。目に涙を浮かべ、言葉をうまく口にするのができずにいる娘の方へと近づいていった。ひょっとすると、彼女に話しかけ、これ以上はもう抑えきれなくなっている気持ちを告白しようとしていたのかもしれない。しかし、そのとき、クロクストンが割って入った。

「そんなところで、もう結構でさあ」と彼は言った。「ほろりとしている場合じゃありませんや。話し合ひましょう、しっかりと」

「何か案があるの、クロクストン？」と娘が訊いた。

「いつだって、案はありますよ」とアメリカ人が答えた。「俺の得意分野ですからね」

「でも、妙案なのかい？」とジェイムズ・プレイフェア。

「素晴らしい案です。ワシントンの閣僚たちだって、皆が皆、これよりもいい案を思いつくわけではないでしょうよ。ミスター・ハリバートはもうこの船に乗っているも同然です」

クロクストンがそう言ったときの様子はいかにも自信たっぷりです、と同

時に文句のつけようもなく真率なものであったので、極度に疑り深い人間でなければ、その確信を共有せずにいることはできなかっただろう。

「おまえさんの話を聞こうじゃないか、クロクストン」とジェイムズ・ブレイフェアが言った。

「わかりました。では、船長さん、あなた様はボーリガード將軍のところへ行ってください。そして、一つ、頼みごとをしていただきたいんです。断られることはないでしょうから」

「どんな頼みごとを？」

「こう言っていただきたいんです。船に一人、素行の悪い奴がいる。どうしようもないろくでなしで、何かと困らされているのだが、この航海の最中も、乗組員たちを煽って叛乱を起こそうとした。つまり、どこまでも見下げ果てた悪党なのだ、と。そして、將軍に、その男を城塞の牢に閉じ込める許可を求めていただきたいんです。ただし、船長さんが出発するときに、その男を引き取って英国まで連れて帰り、彼の国の司直^かの手に引き渡すことにする、という条件付きで」

「よしきた！」となかば微笑みながらジェイムズ・ブレイフェアが答えた。「そのとおりにやってみよう。ボーリガードはきっとこちらの願いを快諾してくれるだろう」

「そうなるに決まっています」とアメリカ人も請け合った。

「でも」とブレイフェアが続けた。「一つ、欠けているものがある」

「おや、何ですか？」

「素行の悪い、ろくでなしだ」

「あなた様の目の前にいるじゃないですか、船長さん」

「何だって？ その見下げ果てた奴っていうのは……」

「俺のことですよ。お気に召さないかもしれませんが」

「まあ！　なんて勇敢で立派な心の持ち主なの！」とジェニーが声をあげ、その小さな手でアメリカ人のごつごつした手を握りしめた。

「仕方がないな、クロクストン」とジェイムズ・プレイフェアが引き取った。「おまえさんの考えていることはよく分かる。残念なのは、ただ一つ、ぼくにはおまえさんの代わりは務まらない、ということだけだ！」

「人にはそれぞれ役割がありますからね」とクロクストンが応じた。「俺の代わりになったりすれば、ずいぶんと窮屈な思いをすることになるでしょうが、俺なら平気です。船長さんには、そのあと、北軍と南軍の砲火をかいくぐりながら錨地を脱出する、という大仕事が控えています。そっちは、到底、俺にやり遂げられることはありません」

「わかった。クロクストン、先を続けてくれ」

「はい。ひとたび城塞に入れたら——俺のよく知っている場所なんです——どんなふうにするのがいいか、考えることにしましょう。ただ、うまくやりますから、ご安心ください。そのあいだに、船長さんの方では船の荷積みを進めていただきたい」

「なあに！ 商売なんて」と船長が言った。「いまとなつてはどうでもいいような些事だよ」

「いいえ、とんでもない！ それに、ヴァインセント伯父様の方はどうなさるんですか！ いったい何とおっしゃることでしょう？ 気持ちにまつわる問題も、商取引も、一緒に進めることにいたしましょう。その方が疑いをかけられずに済みます。ですが、急ぎましょう。6日以内に準備を整えることはできますか？」

「ああ、大丈夫だ」

「それなら、22日の日中にはデルフィン号の荷積みを終えて、出発できるようにしておいてください」

「準備しておこう」

「いいですか、1月22日の夜に、街の端にあるホワイト・ポイント⁸⁵⁾

85) チャールストン半島の南端にある公園「ホワイト・ポイント・ガーデン (White Point Garden)」のこと。

まで、選りすぐりの部下たちを乗せた小舟をよこしてください。9時までお待ちいただければ、ミスター・ハリバートとその召使が姿を現すのをご覧いただけるでしょう」

「でも、どうやってミスター・ハリバートを脱獄させたり、おまえさん自身、脱走したりするつもりなんだい？」

「そいつは俺の方で何とかします」

「大事な大事なクロクストン」とそのときジェニーが言った。「つまり、あなたはお父様を救うために、自分の命を危険にさらそうとしているのね！」

「俺のことはどうかご心配なく、ジェニーお嬢様。何であれ、絶対に危険にさらしたりなんかしませんから。その点に関しちゃあ、信じてくださって大丈夫です」

「さて、そうすると」とジェイムズ・プレイフェアが尋ねた。「おまえさんを投獄してもらわなくちゃいけないのは、いつになるかな？」

「さっそく、今日にでも。おわかりでしょう、俺は船長さんのところの乗組員の風紀を乱しているんですから。無駄にしている時間はありません」

「金は要るかい？ 城塞の中で役に立つかもしれない」

「牢番を買収するための金ですか！ まさか！ 高くつきすぎますし、あまりにも馬鹿げています。そこまですると、牢番は、金も囚人もがっちり抱え込んでしまうんです。それこそが正解なんですがね、牢番にとっては！ いやいや！ 俺には他にもっと確実な方法があります。ただ、何ドルかはいただいおきましょう。必要に応じて、酒でも飲めなきゃいけませんからね」

「あとは、牢番を酔っぱらわせたり」

「いや、酔っぱらった牢番なんてのは、危なっかしいだけですよ！ くだいようですが、俺には俺の考えがあります。やりたいようにやらせてください」

「それじゃ、ほら、10ドルばかり渡しておこう」

「これじゃ多すぎますが、余った分はお返しすることにいたしましょう」

「さて、準備はできたかい？」

「すっかりできましたよ。札付きの悪党になる準備がね」

「じゃあ、出発だ」

「クロクストン」と感極まった声で娘が言った。「クロクストン、あなたは本当に、この世でいちばんいい人よ！」

「まあ、俺もそうなんじゃないかって思っていましたよ」と朗らかに大笑いしながらアメリカ人が答えた。「あ！　そういえば、船長さん、一つ重要なアドバイスがありました」

「何だい？」

「もし万が一、将軍が、あなたのところのろくでなしを絞首刑にしてしまおう、と提案してきたら——ご存じでしょう、軍人ってのは、とにかくまどろっこしいことが嫌いですから！」

「どうしたらいい？」

「じっくり考えたい、とおっしゃってください」

「わかった、約束しよう」

事情を知らされていなかった乗組員たちは大いに驚いたのだが、その日のうちに、クロクストンは鉄の手かせ足かせをはめられて、10人ほどの船員に囲まれながら陸に下りていった。そして、その半時間後、ジェームズ・ブレイフェア船長からの要請を受けて、この素行の悪いろくでなしは、何本もの街路を渡り、抵抗もむなしく、チャールストンの城塞に収監されていたのだった。

この日と、それに続く何日かのあいだ、デルフィン号の荷下ろしがじつに活発に行われた。蒸気で動くクレーンが、ヨーロッパからの積み荷をすべて休みなく運び去っては、代わりに現地の貨物を積み込んでいった。チャールストンの人々は、水夫たちを手伝ったり、彼らに喝采を送ったりしながら、この興味深い作業に立ち会っていた。この気っ風のいい男たち

は、榮譽ある地位を占めていたのだと言ってもいい。南部の人々が、彼らを大いにもてはやしていたのだ。しかしながら、ジェイムズ・プレイフェアは部下たちに、アメリカの人々からの敬意のしるしを受ける余裕を与えなかった。彼はたゆみなく監督し、熱に浮かされたような活発さで彼らを急き立てていたのだが、その原因がどこにあるのかは、デルフィン号の船員たちには見当もつかなかった。

その3日後の1月18日に、綿俵⁸⁶⁾が初めて船倉に積みあがり始めた。ジェイムズはもはや気にも留めていなかったが、チャールストンの埠頭^{ワーフ}を埋め尽くす綿花を残らず捨て値で入手するなど、プレイフェア商会は素晴らしい取引をしていたのである。

しかしながら、クロクストンについてはもう何も新しい情報が入ってきいていなかった。口にくそ出さずにいたものの、ジェニーの心はたえずさまざまな不安に囚われていた。心配のあまり変わってしまった顔つきが、彼女の気持ちを代弁していた。そのため、ジェイムズ・プレイフェアは思いやりのある言葉をかけて彼女を安心させていた。

「クロクストンには全幅の信頼を置いています」と彼は何度も言っていた。「献身的な召使です。彼のことはあなたの方がよくご存じなんですから、大船に乗った気持ちでいてくださらなくては。3日後にはお父様があなたを抱きしめてくれますよ。ほくの言うことを信じてください」

「ああ！ ジェイムズさん！」と娘が声をあげた。「いったいどうすれば、このようなご尽力のお礼をすることができるのでしょうか？ どうすれば、父と私は、あなたへの恩返しの方法を見つけることができるのでしょうか？」

「それは、英国の海域に着いたら申し上げます！」と若き船長は答えた。

ジェニーはしばらく彼を見つめ、それから目を伏せた。その目は涙で

86) 収穫後の綿を硬く圧縮・梱包し、輸送しやすい形にしたもの。綿俵一個の重さは500ポンド、すなわち約227kg。

いっぱいになった。ついで、彼女は自分の船室に戻った。

父親の安全が確保されるまでは、その恐ろしい状況について、娘には何も知らないでいてほしい。ジェイムズ・ブレイフェアはそう願っていた。ところが、その最終日のあいだに一人の水夫がうっかり口にしてしまったせいで、彼女は真実を知ることになる。その前日、前哨線の突破に成功した伝令によって、リッチモンドの政府からの回答が届けられていた。そこにはジョナサン・ハリバートの死刑判決が記されており、この不幸な市民は翌朝銃殺されることになっているという。まもなく刑が執行される、というこの知らせはすぐに街中に広まり、デルフィン号の船員の一人がそれを船に持ち帰った。この男は、ミス・ハリバートが声の届く範囲にいないことに気づかぬまま、船長に報告してしまったのだ。娘は悲痛な叫び声をあげ、気絶して甲板に倒れた。ジェイムズ・ブレイフェアが彼女を船室に運んだが、意識の回復にはこのうえなく熱心な看護が必要だった。

ふたたび目を開けた彼女は、若き船長が唇に指をあてて一言も発してはいけないと伝えようとしているのを目にした。彼女には口をつぐんでいだけの気力が、激しい悲歎の情を抑え込むだけの気力があり、ジェイムズ・ブレイフェアは彼女の耳元まで身を屈めてこう言った。

「ジェニー、2時間もすれば、お父様は窮地を脱してあなたのそばにいるはずです。もしそうでなければ、お父様を救けようとして、ほくも命を落としてしまった、ということなのです！」

ついで、こんなことを考えながら船尾楼を出た。

「さて、こうなったからには、何としてでも救い出さなければ。あの人の自由と引き換えに、ほくの命と乗組員全員の命を差し出さなければならなくなったとしても！」

行動すべき時が来ていた。デルフィン号は朝のうちに綿花の荷積み作業を完全に終えていた。石炭庫もいっぱいだった。2時間後には出航できるはずだ。ジェイムズ・ブレイフェアはすでにノース・コマーシャル・ワー

フからデルフィン号を出し、錨地の中ほどまで進めさせていた。つまり、夜9時に満ちるはずの潮を利用する準備はできていたのである。

娘のもとを辞去した頃には7時の鐘が鳴っていたので、ジェイムズ・ブレイフェアは出発の準備を開始させた。それまでのところ、秘密は絶対確実なやり方で、つまり彼とクロクストンとジェニーのあいだで保持されていた。が、そのとき、彼はミスター・マシューにも状況を知らせておいた方がいいと判断し、すぐにそれを実行に移した。

「仰せのままに」とわずかな異論も唱えることなくミスター・マシューは答えた。「それで、予定は9時なのですね？」

「9時です。ただちに点火を命じてください。それから、どんどん火を強くするように、と」

「かしこまりました、船長」

「デルフィン号は小錨⁸⁷⁾で停泊しています。舳^{もや}い綱^{づな}を切れれば、一秒の無駄もなく出発できるでしょう」

「もちろんです」

「メインマストのてっぺんに船灯を配置せよ、と指示しておいてください。夜は暗いし、霧が晴れてきます⁸⁸⁾。船に戻るときに方向がわからなくなるといった危険を冒すわけにはいきません。さらに、念のため、9時になったら船鐘を鳴らすように指示しておいてください」

「ご命令はすべて寸分の狂いもなく実行します」

「では、ミスター・マシュー」とジェイムズ・ブレイフェアが付け足した。「ギグ⁸⁹⁾の準備をするように言ってください。いちばん腕力のある漕ぎ手

87) 大錨(船首に設置される最も大きな錨)の5分の1から10分の1ほどの重量しか持たない小さな錨のこと。

88) 原文には(自筆原稿、雑誌掲載版、単行本収録版のいずれにおいても)「le brouillard se lève(霧が晴れる)」とあるが、「le brouillard s'élève(霧が出る)」の方が文脈には合っているように思われる。「se lever」と「s'élever」の混同、あるいは誤記だろうか。なお、ヴェルヌは次章では霧が「晴れる」というスタンダードな意味で動詞「se lever」を用いている。

を6人乗せてほしい。ぼくはすぐにホワイト・ポイントへ出発します。留守のあいだ、ミス・ジェニーのことをくれぐれもよろしく。あとは、どうかわれわれに神のご加護のあらんことを」

「神のご加護のあらんことを！」と副船長も答えた。

そして、彼はただちに^{かま}罐の火入れと小舟の用意に必要な指示を出した。数分後には小舟の準備が整った。ジェイムズ・プレイフェアはもう一度だけジェニーに別れを告げ、ギグに乗り込んだ。すると、いまにも漕ぎ出そうというときに、船から大量の黒煙が噴きあがり、それが空の暗い霧に紛れていくのが見えた。

闇は深かった。風が飜いでいた。広大な錨地は絶対的な静寂に支配され、波もまどろんでいるかのようなようだった。ほんやりとした、いくばくかの光が霧の中に瞬いていた。ジェイムズ・プレイフェアが舵を握り、確かな腕前で小舟をホワイト・ポイントの方へと導いていた。行程は約2マイル。昼のあいだに方位を完璧に測定してあったので、ジェイムズはチャールストンの突端まで一直線にたどり着くことができた。

聖フィリップ教会⁹⁰⁾で8時の鐘が鳴る頃に、ギグの船首がホワイト・ポイントにぶつかった。

クロクストンが決めた正確な時刻まではまだ1時間待たなければならなかった。河岸は完全に無人だった。唯一、南側と東側の砲列の見張り番だけが20歩離れたところをぶらぶらと歩いていた。ジェイムズ・プレイフェアは1分また1分と時間を貪っていた。その気ぜわしさに見合った速さで時間が進んでくれているわけではなかった。

8時半に足音が聞こえた。オールを握ったまますぐにでも出発できる態勢でいる部下たちを残し、船長は前方へと進んだ。が、10歩も行くと、見

89) [原註——先端部分が両方とも尖っている軽快なボートのこと。]

90) チャールストンのチャーチ・ストリートにある教会。ホワイト・ポイントからは約1kmの距離にある。

回りをしている沿岸警備隊に出くわした。全部で20人ほどだ。ジェイムズは、必要に迫られたら使おうと意を決してベルトから回転式拳銃^{リボルバー}を引き抜いた。とはいえ、彼に何ができたろう？ 兵士らは河岸にまで降りてきた。

そこでは、巡視隊の隊長がやって来てギグを目にすると、ジェイムズにこう尋ねた。

「この小舟は何かね？」

「デルフィン号のギグです」と青年が答えた。

「では、あなたは？……」

「ジェイムズ・プレイフェア船長です」

「もう港を出て、チャールストンの水路にいらっしゃるんだろうと思っていましたよ」

「出発の準備は整っていて……それどころか、本来であればもう航海の途上になくはならないのですが……ただ……」

「ただ？……」と沿岸警備隊の隊長がしつこく訊いた。

ジェイムズは、ふとした考えに頭を射抜かれて、こう答えた。

「うちの船員に一人、城塞に監禁されている奴がいるんですが、いやはや、うっかり忘れてしまうところでした。さいわい手遅れになる前に思い出せたので、部下たちを迎えにやっているところなんです」

「ああ！ あなたが英国に連れ帰ろうとしている、あの悪党のことですか？」

「そうです」

「あちらでも、こちらでも、同じくらい首尾よく縛り首にできたでしょうけれどね！」沿岸警備員はそう言って、自分の口にした冗談に笑った。

「それはそうでしょうね」とジェイムズ・プレイフェアも相槌を打った。「ただ、何事も規定通りに進めた方がいいものですから」

「それでは、船長さん、幸運をお祈りしていますよ。でも、モリス島の

砲列には用心してくださいね」

「ご安心ください。前回も無事に通れたわけですから、今回もまた同じように出られると期待しています」

「よい旅を」

「ありがとう」

そんな言葉を交わすと、小隊は遠ざかっていき、砂浜では静寂が続いた。

そのとき、9時の鐘が鳴った。約束の時刻だ。ジェイムズは胸の中で心臓が破裂しそうなほど強く脈打つを感じた。口笛の音が響いた。ジェイムズも同じような口笛で応えた。それから耳をそばだてながら、また、水夫たちに絶対に音を立てるなと手で指示を出しながら、待った。ゆったりしたタータン⁹¹⁾に身を包んだ男が、きょろきょろとあたりを見回しながら現れた。その男の方にジェイムズが駆け寄った。

「ミスター・ハリバートですか？」

「いかにも」とタータンの男は答えた。

「ああ！ 神の讃えられんことを！」とジェイムズ・プレイフェアが叫んだ。「すぐに舟に乗ってください。クロクストンはどこですか？」

「クロクストンだと！」ミスター・ハリバートは呆気にとられた様子で答えた。「いったいどういうことかね？」

「あなたを救い出した男、あなたをここまで案内してきた男は、あなたの召使、クロクストンなのです」

「わしを連れてきた奴は、この城塞の牢番だぞ！」とミスター・ハリバートは答えた。

「牢番ですって！」とジェイムズ・プレイフェアが声をあげた。

当然のことながら何のことやらさっぱりわからず、彼は無数の不安に襲われた。

91) ^{ハイランド} 伝統的にスコットランド（特に高地地方）で用いられてきた綾織の毛織物。多彩な色の格子模様（いわゆる「タータン・チェック」）を特徴とする。

「ああ、そうそう、牢番ね！」と聞き覚えのある声が叫んだ。「牢番！あいつは俺の独房で、切り株みたいにぐっすり眠りこんでいますよ！」

「クロクストン！ おまえか！ おまえだったのか！」とミスター・ハリバート。

「ご主人様、お静かに！ あとで全部ご説明します！ あなた様の命がかかってるんです！ さあ、乗って、乗って」

3人は小舟に乗り込んで席に着いた。

「出発だ⁹²⁾」と船長が叫んだ。

6本のオールが^{いちどき}一時にそれぞれのオール受けに降ろされた。

「漕ぎ方、始め⁹³⁾」とジェイムズ・プレイフェアが指示を出した。

すると、チャールストン・ハーバーの暗い波の上を、ギグは魚のように滑っていった。

IX 砲火に挟まれて

6人の屈強な漕ぎ手によって漕ぎ出されたギグは、錨地の水面を飛ぶように走っていた。霧が濃さを増し、ジェイムズ・プレイフェアは方位線内に針路を保つのに苦労していた。クロクストンは小舟の前方に陣取り、ミスター・ハリバートは後方、船長のそばにいた。囚われの身であった男は、自分の召使がいるということにまずは仰天し、彼に言葉をかけようとした。が、召使の方では、しゃべらないでいた方がいい、ということを彼に身振りで伝えた。

とはいえ、数分後、ギグが錨地の中ほどまで来ると、クロクストンは口をきくことにした。ミスター・ハリバートの頭の中にひしめいているはずの問いがどんなものであるかを理解していたのだ。

92) 原文の「Pousse」は漕艇用語。文字通りには「ボートを岸から離せ (pousse au large)」の意だが、単なる出航の指示としても用いられる。

93) 原文の「Avant partout」は漕艇用語。漕手たちはこの指示を受けるとオールを一斉に漕ぎ始める。

「ええ、そうなんです、ご主人様」と彼は言った。「独房には、俺の代わりに牢番が入っています。中でげんこつを2発、食らわしてやったんです。1発は襟首に、もう1発はみぞおちに、麻酔代わりにね。晩飯を運んできてくれたときのことでした。なかなかたいした恩返しでしょう！俺は奴の制服を奪い、鍵を奪い、あなた様を探しに行き、兵士たちの目の前で公然と、あなた様を城塞の外へお連れしたんです。そんなに難しいことじゃありませんでしたよ！」

「だが、わしの娘は？」とミスター・ハリバートが尋ねた。

「これから俺たちを英国まで連れて行ってくれる船の上です」

「なんと、娘も来ておるのか！」と勢いよく立ちあがりながらアメリカ人が叫んだ。

「お静かに！」とクロクストン。「あと何分かの辛抱で、助かるんですから」

小舟は闇の中を飛ぶように進んでいたが、方向はややでたらめだった。霧の中なので、ジェイムズ・プレイフェアにはデルフィン号の灯火が見えなかったのだ。彼はどちらの方向へ行くべきか迷っていた。あまりにも暗いので、漕ぎ手たちには自分のもつオールの先さえ見えてはいなかった。

「調子はどうですか、ジェイムズさん？」とクロクストンが言った。

「1マイル半は来たはずなんだが」と船長が答えた。「何も見えないね、クロクストン！」

「何も見えません。目はいいんですがね。でも、大丈夫！そのうち着くでしょうよ！奴ら、何も気づいてませんからね、向こうでは……」

この言葉が言い終えられる前に、火矢が1発打ち上げられて暗闇に筋をつけ、凄まじい高度で花開いた。

「信号だ！」とジェイムズ・プレイフェアが叫んだ。

「ちくしょうめ！」とクロクストン。「城塞からだな。様子を見てみましょう」

2発目、それから3発目の火矢が1発目と同じ方向に放たれ、その後すぐに同じ信号が小舟の前方1マイルのところでも発せられた。

「あれはサムター要塞からだ」とクロクストンが声をあげた。「脱獄を知らせる信号です。全力で漕いでくれ！ 何もかも、ばれちゃった」

「みんな、力いっぱい漕いでくれ」と水夫たちを鼓舞しながらジェイムズ・プレイフェアが叫んだ。「あの火矢がルートを照らしてくれた。デルフィン号まではもう800ヤード⁹⁴⁾もない。ほら、船鐘も聞こえるぞ。がんばれ！ がんばるんだ！ 5分で着いたら20ポンド出そう！」

水夫たちが猛烈に漕ぎ進めたギグは、波をかすめて飛ぶかのようにだった。皆の心臓が早鐘を打っていた。ちょうど街の方角で砲声が轟いたところだった。そして、小舟から20ブラス〔約32m〕のところを高速の物体が通り過ぎていくのをクロクストンは見た——というよりは、耳にした。それこそが砲弾だったのかもしれない。

その頃にはデルフィン号の船鐘がけたたましく鳴っていた。距離が縮まっていた。さらに何度かオールを漕ぐと、小舟は船に横づけになった。そのさらに数秒後に、ジェニーが父親の腕の中に飛びこんだ。

ただちにギグが引き揚げられ、ジェイムズ・プレイフェアが船尾楼甲板に駆けあがった。

「ミスター・マシュー、始動可能ですか？」

「はい、船長」

「舳い綱を切れ、と指示を出してください。それから、全速前進です」

その数瞬後には2本のスクリューに押された蒸気船が主水路の方へと進み、サムター要塞からは遠ざかっていた。

「ミスター・マシュー」とジェイムズが言った。「サリヴァン島の水路に入っていくなど論外です。南軍の砲火をもろに浴びることになってしまい

94) 〔原註——約700メートル。〕

ますからね。北軍の砲列からは一斉射撃を受けることになるかもしれませんが、できるかぎり錨地の右側に寄せていくことにしましょう。操舵手は腕の確かな男ですか？」

「はい、船長」

「船の明かりや標識灯を消させてください。蒸気機関の反射だけでも明るすぎる、まったくもって明るすぎるんですが、そちらはどうすることもできません」

こんな言葉を交わしているあいだにデルフィン号はものすごい速さで進んでいた。が、チャールストン・ハーバーの右側に寄ろうと旋回したため、サムター要塞に一時的に接近することになる水路を通ることを余儀なくされていたのだった。そして、要塞から半マイルも離れていないところまで来ると、その砲眼が一斉に光を放ち、雨あられと降りそそぐ鉄塊が、凄まじい砲声とともに蒸気船の前方を通り過ぎていった。

「早すぎたな、頓馬な連中め！」爆笑しながらジェイムズ・ブレイフェアが叫んだ。「焚きまくれ！ 焚きまくれ！ 機関士さん！ 両側からの一斉砲撃のあいだを突っ切らなきゃいけないんだ！」

火夫たちが罐の火をかき立てていた。蒸気機関の圧力を受けたデルフィン号は、肋材のどこもかしこもが小刻みに震え、まるでいまにもバラバラになろうとしているかのようなようだった。

そのとき、第二の砲声が聞こえた。そして、新たな砲弾の雨が、蒸気船の後方で鋭い風切音を立てた。

「遅すぎるぞ、馬鹿どもめ！」まさしく咆哮と呼んでもよさそうな声をあげて、若き船長が叫んだ。

すると、船尾楼甲板にいるクロクストンが大声で言った。

「難所を一つ越えましたね。あと数分で、南軍の連中ともおさらばです」

「それじゃ、サムター要塞についてはもう何の心配も要らない、というのがおまえさんの考えなのかね？」とジェイムズが尋ねた。

「ええ、あとはサリヴァン島の端っこにあるモールトリー要塞の方だけです。ただ、あの要塞は30秒しか俺たちを射程に捉えておくことはできないでしょう。ですから、こっちに命中させたいなら、タイミングを見極めて、正確に狙いをつけてほしいもんですな。ただいま、接近中です」

「よし！ モールトリー要塞があ的位置にあるおかげで、ぼくらはまっすぐ主水路に入っていけるはずだ。だから、撃て！ 撃ってこい！」

その瞬間、あたかもジェイムズ・ブレイフェアが発砲を命じたかのように要塞が輝き、3本の閃光を発した。ぞっとするような轟音が響きわたり、ついで、蒸気船のどこかでバキバキと物の折れる音がした。

「今度は命中しちゃった！」とクロクストン。

「ミスター・マシュー」と船首に陣取っていた副船長に向かって船長が叫んだ。「何が起こったんですか？」

「船首斜檣バウスプリットのジブブーム⁹⁵⁾が海に落下しました」

「負傷者は出ていますか？」

「いいえ」

「それなら、棒材なんぞ、どうにでもなれだ！ 水路へ直進！ 直進！ それから島に沿うように舵をとれ」

「南部の連中なんざ、壊滅しちゃえばいい！」とクロクストンが叫んだ。「こっちの船の骨組みにどうしても食らわなきゃいけないっていうんなら、北の砲弾の方がありがたいね。その方がまだうまく消化できるってもんだ！」

実際、すべての危険が回避されたわけではなかったし、デルフィン号は窮地を脱したとみなすこともできなかった。というのも、モリス島はまだ数か月後に設置されることになる恐るべき大砲を備えているわけではなかったが、とはいえこの島の大砲や臼砲をもってすれば、デルフィン号の

95) バウスプリット 船首斜檣の先に取り付ける棒材であり、「第二斜檣」とも呼ばれる。船首三角帆や前帆の一端をこれに結び付ける。

ような船舶はいともたやすく沈めることができたからだ。

島にいる北軍や海上封鎖に参加している船は、サムター要塞とモールトリ要塞からの砲撃によって、すでに警戒心をかき立てられていた。攻囲軍にとって、この夜襲はまるっきり訳が分からず、それが自分たちに対して仕掛けられたものであるとも思えなかった。それでも迎撃準備は整えているにちがいないし、実際に整えてもいた。

モリス島の水路を進みながらジェイムズ・プレイフェアが考えていたのは以上のようなことであり、彼が気を揉むのももっともなことだった。というのも、15分もすると、暗闇の中に幾筋もの光が走ったからだ。小型爆弾の雨が蒸気船の周りに降り注ぎ、甲板の手すりを超える高さにまで水を噴きあがらせた。中にはデルフィン号の甲板を打つものさえあったが、爆弾が底の方から落ちてきてくれたおかげで船は命拾いした。事実、あとで知ったところによると、これらの爆弾は炸裂すると無数の破片と化し、その1発1発が120平方ピエ〔約13㎡〕もの広さをギリシア煙硝⁹⁶⁾の火で覆う、という代物だったのだが、その火はどうやっても消し止めることはできず、しかも20分にわたって燃え続ける、というのである。この爆弾一つで船を1隻焼き払うことだってできただろう。デルフィン号にとっては幸いなことに、この爆弾は発明されてからまだ日が浅く、ずいぶんと不完全な点があった。すなわち、ひとたび空中に放たれるや、回転運動がうまくいなくて傾いたままとなり、落下の際に撃発装置のある先端部分で標的を打つ代わりに、お尻の方から落ちてしまうことが多かったのだ。ひとえにこの製造上の欠陥のおかげで、デルフィン号は九死に一生を得た。さほど重量のないこれらの爆弾が落ちてきたところでたいした損害は起こ

96) 東ローマ帝国で用いられていた液体状、あるいは半液体状の火薬。この火薬による攻撃を受けた船は、水では消すことのできない火に蝕まれ、沈むまで燃え続けたという。その製法や組成に関する情報は国家機密とされ、東ローマ帝国の滅亡とともに失われてしまったが、生石灰、軽油、硫黄、松脂などが主成分だったのではないかと推測されている。

らず、船は過熱蒸気の圧力がかかった状態で水路を進み続けた。

そのとき、ミスター・ハリバートとその娘が、船尾楼甲板にいるジェイムズ・プレイフェアのところまで彼の命令を無視してやって来た。船長は二人を船室に帰そうとしたが、ジェニーはあなたのおそばを離れませんと言いつ張った。

一方、ミスター・ハリバートは命の恩人の気高い振舞いを残らず知らされたばかりであり、一言も発することができないままに、船長の手を握りしめた。

その頃、デルフィン号は外洋を目指して猛烈な速度で前進していた。水路をあと3マイルも行けば、大西洋に出られるはずだ。水路の出口が通行可能でさえあれば、助かった、ということになる。ジェイムズ・プレイフェアはチャールストン湾のあまり人に知られていないような部分に至るまで、すべて見事に知り尽くしていたので、暗闇の中でも比類のない的確さで船を操っていた。そのため、己の大胆な道行きの成功を信じるだけの理由が十分にあったわけだが、そんな折、船首楼の水夫が声をあげた。

「船です！」

「船だって？」とジェイムズも叫んだ。

「そうです、左舷後方です⁹⁷⁾」

その頃にはもう霧が晴れていたもので、水路をふさぎ、デルフィン号の通行を妨げようとしている大きなフリゲート艦を視認することができた。何としてでも速度において勝らなくてはならないし、そのためには蒸気船の機関にさらなる推進力を求めなければならない。さもなくば、万事休すだ。

「面舵いっぱい！」と船長が叫んだ。

それから、機関の上に架かる船橋の上に駆けあがった。彼の命令を受け

97) 原文には（自筆原稿、雑誌掲載版、単行本収録版のいずれにおいても）「hanche de bâbord（左舷後方）」とあるが、「左舷前方」の方が文脈には合っているように思われる。

てスクリューは1本が停止し、残る1本のみの作用によって、デルフィン号は半径のごく短い円を描きながら、まるでその場で回転したかのように途方もない速さで船首の向きを変えた。そうすることで、北軍のフリゲート艦に突っ込んでしまうのを避け、その艦と同様に水路の出口へと向かったのである。あとは、速さの問題だった。

自分が助かるか否か、ミス・ジェニーとその父が、さらには乗組員全員が助かるか否かは、その点にかかっているのだということをジェイムズ・プレイフェアは理解した。フリゲート艦はデルフィン号をはるかに引き離していた。煙突から出ている大量の黒煙を見れば、軍艦がなおも火力を強めているということが分かった。ジェイムズ・プレイフェアはいつまでも後れを取っているような男ではなかった。

「そっちはどうなっている？」と彼は機関士に叫んだ。

「圧力最大です」と機関士は答えた。「どのバルブからも蒸気が漏れ出しています」

「バルブをきっちり閉めてくれ」と船長が命じた。

そこで、船が爆発して吹き飛ぶ危険を冒しながら、この命令は実行された。

デルフィン号はさらに速度を上げて航走し始めた。次から次へと凄まじい勢いでピストン運動が続いた。この激しい打撃を受けて、機関のベースプレート全体が震えていた。それは、どれほど艱難辛苦に慣れた心臓をも戦慄^{わなな}かせてしまうような光景だった。

「蒸気圧を上げろ！」とジェイムズ・プレイフェアが叫んでいた。「まだまだ上げるんだ！」

「無理です！」とすぐに機関士が答えた。「バルブはがっちり閉まっています。罐^{かま}も口までいっぱいです」

「だからどうした！ 綿に酒精を滲みこませて罐に押し込め！ 何としても通らなくちゃいけないんだ、あのいまいましいフリゲート艦を追い抜

かねば！」

この言葉を聞いて、豪胆無比の水夫たちも顔を見合わせたが、ためらいはしなかった。機関の燃焼室の中に、綿俵がいくつか投げ入れられた。酒精の樽の底が抜かれ、燃えさかる火室の中に、危険がないとは言えなかったものの、この可燃性の物質が流し入れられた。炎の唸りのせいで、火夫らにはもう互いの声が聞こえなかった。罐の^{プレート}金属板がすぐに赤熱し、白みを帯びた。ピストンが、まるで蒸気機関車のそのように往復していた。^{マノメーター}圧力計も恐るべき圧力を示していた。蒸気船は波の上を飛んでいた。連結部分が軋んでいた。煙突からは、煙の渦に混じって炎がどっとほとぼしり出ていた。蒸気船は常軌を逸した恐ろしい速度にとらえられてはいたが、その一方で、フリゲート艦を上回り、追い越し、引き離し、10分後には水路の外に出ていた。

「助かったぞ！」と船長が叫んだ。

「助かった！」と乗組員たちも拍手喝采しながら応えた。

すでにチャールストンの灯台は南西の方角で視界から消え始めていた。その灯火の輝きが次第に薄れ、これでもう窮地を脱した、と思いきや、思っていたところ、沖合を巡航している砲艦から放たれた爆弾が一つ、鋭い音を立てながら暗闇の中を舞った。後方に一筋の火を残していく信管のおかげで、その軌道はたやすく目で追うことができた。

それは、とうてい描き出しようもない不安のひとつきだった。誰もが押し黙り、誰もが怯えたようなまなざしで砲弾の描く放物線を見つめていた。爆弾をよけるためにできることは何もなく、それは30秒後に物凄い音を立ててデルフィン号の船首に落下した。

船員たちは恐怖に襲われて船尾へと流れていき、信管がパチパチと烈しい音を立てて燃焼しているあいだ、誰一人として一步を踏み出す勇氣はなかった。

しかし、ただ一人、並外れて勇敢な男がこの凄まじい破壊兵器に突進し

ていった。クロクストンだ。信管から無数の火花が洩れ出してはいたが、彼は力強い2本の腕で爆弾を抱えた。ついで、超人的な努力でもって舷側から投げ落とした。

爆弾が水面に届くや否や、途方もない爆発音が起こった。

「万歳！ 万歳！」声を一つに合わせてデルフィン号の乗組員全員が叫んだ。かたや、クロクストンは満足げに揉み手をしていた。

しばらくすると、蒸気船は大西洋の水を切って快調に進んでいた。アメリカの海岸は闇の中に消えつつあり、水平線上に交わる遠くの火が、モリス島の砲列とチャールストン・ハーバーの要塞のあいだで大規模な戦闘が行われているということを示していた。

X 聖マンガー

翌日、日の出の頃にはもうアメリカの海岸は見えなくなっていた。水平線上には船の1隻すら見あたらず、デルフィン号は恐ろしいまでの航行速度を緩めて、それまでよりものんびりとバミューダ諸島の方へ向かった。

この大西洋横断がどのようなものだったかを語る必要はあるまい。帰りの旅では何一つ事件も起こらず、チャールストンを出発してから10日後に、アイルランドの海岸が視界に入ってきたのだった。

若き船長と娘とのあいだには、どんなことが起こったのだろうか？——それは、このうえなく鈍感な人々にさえ予想のつくものであったわけだが。ミスター・ハリバートは、命の恩人の献身と勇気に対して、どんな方法で感謝を示すことができただろうか？——彼を、この世でいちばん幸せな男にしてやること以外に。英国の海域を待たずして、ジェイムズ・ブレイフェアは心から溢れ出る感情を父娘^{おやこ}に告げ、クロクストンによれば、ミス・ジェニーはこの告白を喜びを隠そうともせずを受け取った、とのことである。

かくしてこの年の2月14日、古くからあるグラスゴーの大聖堂⁹⁸⁾、聖

マンゴーの重々しい穹窿の下に、大勢の人々が集まる次第となった。そこには船乗りも、貿易商も、実業家も、司法官も、さまざまな人々が少しずつそろっていた。善良なるクロクストンはウェディングドレスを着たミス・ジェニーの証人を務め、この尊敬すべき男は金ボタンの付いた青りんご色の燕尾服を着て顔を輝かせていた。ヴィンセント伯父さんも、甥の近くで誇らしげに佇んでいた。

要するに、グラスゴー出身、ヴィンセント・プレイフェア商会のジェイムズ・プレイフェアと、ボストン出身、ミス・ジェニー・ハリバートの結婚式が執り行われていたのである。

^{セレモニー}式典は荘重に実施された。誰もがデルフィン号の物語を知っており、誰もが若き船長の献身は正当に報いられたのだと考えていた。船長本人だけが、自分の手柄以上に大きな報酬を受け取ってしまった、と思い込んでいた。

夕刻になると、ヴィンセント伯父さんの家での盛大なお祝い、盛大な食事会、盛大な舞踏会、それからゴードン・ストリート⁹⁹⁾に集まった群衆へのシリング硬貨¹⁰⁰⁾の大盤振舞である。この記念すべき祝宴のあいだに、クロクストンは、しかるべき節度を守ってはいたものの、ものすごい勢いでご馳走を平らげていった。

誰もがこの結婚を喜んでおり、自分の幸せを喜んでいる者もいれば、他人の幸せを喜んでいる者もいた——この種の式典では、必ずしもそんなふうになるとは限らないもののだが。

夜になり、大勢の招待客たちが引き揚げてしまうと、ジェイムズ・プレ

98) グラスゴーの大聖堂は、この街の創設者であり初代司教でもあった聖マンゴー (Saint Mungo, 518-614) に捧げられており、「聖マンゴー大聖堂 (Saint Mungo's Cathedral)」とも呼ばれる。12世紀にスコットランド国王デイヴィッド1世によって創建された後、幾度もの増改築を経て現在の姿へと至る。

99) グラスゴーの中心部にある通りの一つ。

100) 当時の英国の補助通貨 (1シリングは1ポンドの20分の1に相当)。十進法を採用するために1971年に廃止された。

イフェアは伯父の両頬に挨拶のキスをしに行った。

「ねえ、ヴィンセント伯父さん」と彼は言った。

「何かね、甥っ子のジェイムズよ」

「デルフィン号に載せてきた、この素敵な積み荷にはご満足いただけましたか？」勇敢な若妻を示しながら、プレイフェア船長が続けた。

「そりゃあ、もちろんさ！」と、この尊敬すべき貿易商は答えた。「あの綿花を売って、375 パーセントもの利益を叩き出したんだからな！」

完

[訳者付記]

本稿は、南北戦争期のグラスゴー（スコットランド）とチャールストン（アメリカ合衆国）、さらにはその間に広がる大西洋を主な冒険の舞台とするジュール・ヴェルヌ（Jules Verne, 1828-1905）の中篇小説「海上封鎖破り（Les Forceurs de blocus）」の全訳である。

底本には、1871年に刊行されたエッツェル社の単行本『浮かぶ都市』に収録されているバージョン¹⁰¹⁾を用いたが、このテキストに誤記等の疑われる不自然な箇所が見つかった場合には、フランス国立図書館のデジタルライブラリー「Gallica」で公開されているヴェルヌの自筆原稿や、ヴァリアント——「現代風俗研究——海上封鎖破り」というタイトルで雑誌『家庭博物館』1865年10月号・11月号に掲載されたもの¹⁰²⁾——を参照

101) Jules Verne, « Les Forceurs de blocus », *Une ville flottante suivi des Forceurs de blocus*, Paris, J. Hetzel, coll. « Bibliothèque d'éducation et de récréation », 1871, p. 199-290.

102) Jules Verne, « Études de mœurs contemporaines. Les Forceurs de blocus », *Musée des Familles. Lectures du soir*, t. 33, octobre 1865, p. 17-27 ; et novembre

しつつ、校訂作業を行った。

本作品の先行訳は、存在していないというわけではないが、いずれも明治・大正期に発表されたものなので¹⁰³⁾、入手しやすさの面から見ても、リーダビリティの面から見ても、現代日本の読者にとってアクセスしやすいものであるとはいいがたい。約1世紀ぶりの新訳を、ここに上梓せんとする所以である。

訳文の作成にあたっては、原文への忠実さを何よりも重視したが、誤植等、明白な誤りについては特に断ることなく修正したほか、《会話文中における話し相手への呼びかけの言葉》は、逐一訳していくと、日本語での発話としては不自然になることが多いので、過剰と思われるものを若干削除している。また、地名・人名等のカタカナ表記に関しては、原音の正確な転写にこだわりすぎて、かえって分かりにくくなる、といったケースもしばしば見受けられるので、本稿では基本的に慣例に従った。なお、本文においても、註においても、〔 〕内の記述は訳者による補足である。

末筆ながら、ラテン語に関する不明点について貴重なご教示をくださった成城大学の松澤裕樹先生に心より御礼を申し上げます。

1865, p. 35-47.

103) まず1887年8月26日から9月14日にかけて、森田思軒による翻訳が「煙波の裏」というタイトルで「郵便報知新聞」紙上に発表された(『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》27 ヴェルヌ集Ⅰ』大空社、1996年、p. 134-158に影印が収録されている)。ついで、1913年頃、有松鷗水による翻訳が「凌雲丸」というタイトルで雑誌『少年界』に連載されたという。詳しくは、日本ジュール・ヴェルヌ研究会の会誌『Excelsior Ⅰ』第10号収載の「〈驚異の旅〉全リスト」(特に p. 301-302)を参照のこと。